

官板  
海外新聞別集  
下卷

8  
示  
2





門 伍 八  
番 〆  
卷 之

海外新聞別集

文久二年閏八月印刷

原本紐約新聞第百零三號

千八百六十二年五月二十四日

六月六日

北格阿利納野戰の事

カゴアリナ



我畫工スケルダ甲比丹モルリスの火攻臺場を築んとて働  
ける徒の立退きとる有様を畫きとる圖の裏に早書を以て  
記しとる數十行の書付に左の事を載せとる諸敵方のコロ  
子ルホアイトを其臺場の位置を委しく知り且其働く徒を  
妨げんと欲して屢暴母丸を打掛たり是より雙方とも士卒  
よ下知し或も譽め或を罵りて勇氣を引立たり折しも番兵



を砂山の頂より竊し其有様を見て打掛よと下知すふや否  
マコン砦の大砲より火煙の起るを見て各手早くビーレン  
の軍隊を爲して最も近き砦より立退きとり之を以て漸く危難  
を免れ頭上より落來る暴母丸は當れる者の外は手を負ひ  
とり者更にも無し但マコン砦の他の圖も前の新聞紙より出せ  
り  
第五月十一日夜十一時よりモンルー砦より出せる軍事書記  
官の使節ノルホルクを奪ひとり由并はメルリマク船の破  
壊せるを告知せしと左の如し  
ノルホルク并はポルツモート及び海軍所を皆予等の有と

かれり諸十一日の朝九時軍兵悉くウルローバインポイント  
に著岸しければ大將ウール其兵都合五千を率ひてノルホ  
ルクに攻寄せたり此時軍事書記官タースを大將は附添へ  
り  
著岸せる地より凡五里程よりしてテン子ルスクリーキ河に  
架せる橋あり其對岸に敵軍の臺場あり之に向て先は進め  
る二組の歩兵は稍鐵砲を打掛りて勝つたりと思ひけ  
ん敵軍其橋を燒拂へり故に我軍兵直は進むと能わざれば  
又五里の廻路を爲して進みたり午後五時より我軍兵ノルホ  
ルクに近寄りければ敵方の百姓總代某出來りて降參を請



ひ其式を正して都府を渡りたり因て我軍兵府内より進入  
り遂にノルホルクを乗取りたり此時大將ヒールを軍事宰相  
とかり其地より留りて取鎮めたり

數時の間見へたる焰を薪木の燃へたるよて都府および海  
軍所の焼拂をれたるよあらず

大將ヒデルを戦はずして己の士卒と共に退きたり

此夜十一時よ大將ウールを書記官ゼースと共に凱旋せり

又此日の午後よ指揮官軍兵を出り占士河よ遡る由を聞け  
り

セームス

MEMPHIS によて敵の鐵張船敗北せる事

第五月十日密斯昔比河濱に在るピルロー砦のベントンと  
ミスシフヒー

云へる旗船の海軍書記官甲比丹ダヒスより次の説を得  
り

今朝敵軍の既よ用意せる海軍の戦争始れり此時敵軍を八  
艘の鐵張船よて内四艘をラム船と稱して敵船を突破る為  
よ設けたる船あり其船迅速よ走來りて一時の間合戦止ざ  
りしが敵軍遂よ二艘を奪をれ一艘を砦より打掛けたる鐵  
炮を避んとし最も速よ走りたるを以て沈没せり我船隊の  
中六艘此戦よ臨めり其中シンシンナチ船をラム船に當り  
て損トされども今度の戦よ用ゆる能をざるよ至らず甲比



丹ステムプルを拔羣の功を顯せーグ深手を負ひさりとど  
ベントン船も損せず第十四號の加農船をセコンドグレゴ  
リーの差圖よて甚ど勇まーき働をかせり折ーも敵軍船隊  
の指揮官をホルリスンかゝるべー

コリント近傍合戦の事

第五月九日午後典控<sup>テンチン</sup>ハルミングトン近傍の地よりマシ  
ルゼ子ラールハルルクよ告知らせーと左の如ー

敵軍の精兵二萬人ハルミングトンの外又置きさる番兵を  
押破りて我陣所の前を流る河の對岸よ屯するブリゲード  
隊よ襲掛れり時よブリゲード隊を五時の間防戦ひされど

全軍を率ひて河を渡らずんば彼等を救ふ能もトとて我全  
軍河を渡り遂よ之を助け隊伍を正して此岸よ立戻れりさ  
れどブリゲード隊も勇氣盛んよいて退くを甚ど快くと思  
まざりー

敵軍已よ河を渡るべき下知ありー此事遂よ行もれざり  
予未と味方の手負討死幾何あるを知らざれと極て數多か  
るべー又敵兵多くを砦を構へざるを以て甚と艱めり況や  
其一の臺場を全く打毀されて用也べうらず且其歩兵隊を  
數度追戻されとり又予の指揮を最も速よ行届けり但ハル



ミングトンをコリントより北西五里あり此時戦ひとる軍  
兵をプリンメル及びバルムルのブリゲード隊のみあり

費爾治尼亞路法の事  
ビルギニア

今北部の軍卒費爾治尼亞よ赴くよ就ても次の表肝要とる

一

ノルホルクより

理治門的迄  
リチモン

百零六里

ソホルクより

同

八十五里

ケープヘンリーより

同

百五十里

ヘムプトンより

同

九十六里

モンルー砦より

同

九十九里

ヨルクトランより

同

七十里

ウレルムスビルクより

同

六十里

フレデリキスビルグより

同

六十五里

華盛頓より

同

百三十里

ウインチェストルより

同

百五十里

ゴルトンスヒルレより

同

七十里

ストラントンより

同

百二十里

ウレルムスビルグの戦争

ウレルムスビルグを攻取りとる合戦及びヨルクトラン  
在る敵兵第二砦の合戦を最も盛んふりとす諸敵方のヨル



クトランに設けたる砦より其諸具を竊に運び立退りんと  
 せし時偽計を設けて之を隠せし巧者なる指揮官ありて  
 之を探索せり尤其偽計を銃兵數十人を残置き立退きたる  
 後よて騒しく號令を傳へ加農炮を放つべしとかり其計の  
 如く已に立退きたる後數十人の敵兵劇しく鐵炮を打掛け  
 たりしが此時ナポレオンなる者之に向ふを無益なるを知  
 て直に己の軍卒を敵兵の立退ける道筋に差向けたり然れ  
 ども其道筋に出る頃を右數十人の敵も逃去り且敵の大  
 軍を既に理治門の方へ退けり夫より我兵勇ましく北を  
 を追て終に追付たりベインタルマンの兵卒を此敵兵を甚

ど急速に追散らしタルレムスビルグ古邑の近傍に設けと  
 る第二の砦を襲ひたり予等の軍兵を凡八千人又討手の來  
 るを防んとて必死を極めたる敵の後陣を三萬餘人加之爰  
 にも大砲を備へたる臺場あり而して予等の軍卒も兵糧乏  
 しく且終夜大雨に身を濕して疲勞甚ざりければと更に厭へ  
 る色なく今朝合戦に取掛れり頃て大將ゴロフルのブリゲ  
 ード隊真先に進みて戦を始めければ之に續き大將ペテル  
 ソン且シクルスブリゲード隊進んで援兵とかり勇を振ひ  
 戦を挑みて敵軍の勢に屈せざりしが今も兵糧乏しきのみ  
 からず各レダメンド隊の火藥盡き士卒の疲勞極りて三人



よ一人からでと敵軍は攻掛るものあり而して敵軍を愈執  
 よ乗トて群來れども猶屈せず死を決して挑戦ひ一步も其  
 地を退らず又臺場數箇所を警固する人馬ふきを以て敵兵  
 の為は奪むるゝと雖も戦を止めざりしナポレヲンのワー  
 テルローは於る如き此勇猛ある大將へインテルマンを急  
 使を以て後軍の兵は早く援くべしと言遣しさり因て後軍  
 より緬のベルリール鳥遮爾此のケル子し及び其將へンコク  
 來り自らら立派ふる銃鎗を以て敵砦の右を攻め各大は戰  
 ひ敵軍を追散して其砦を奪取り其夜の中は悉くウルレム  
 スビルクを立退しめたり

諸も悲歎すべきを此日の合戦は出さるブリゲード及びレ  
 デメント隊の兵卒最も夥しく損トさる事あり第一レデメ  
 ント隊ゲリック隊のブリの中よて討死手負の者逃去る者二百  
 五十人あり其中討死も七十七人第五レデメント隊も討死  
 四十九人第一馬洩朱些斯マッサキミヤシレデメント隊も討死四十二人手  
 負百二十三人あり之を他の大合戦は比ぶれも歐羅巴各國  
 の最も盛ふる戦よても及むざりしバラクラハ戦一のラ  
 イトブリゲード隊の戦争と雖も比ふるよ足らず奧地利と  
 佛蘭西と雙方必死の戦ひとりし時も士卒の討死手負二萬  
 三千人あり八萬五千人は満さざれむ今度の戦争と比すべ



うらず又もアルマ河（俄羅斯の）の大合戦は英佛の軍兵五萬一  
千餘よて其討死手負一萬五千を出されむ（ウルレムスビル  
グよて戦ひさるブリゲード隊の三分一より少くされど誹  
謗を好む英人廣言を好む佛人及び愚人も合衆國の兵士勇  
ありて能く熟練し且堪忍あるを稱するを厭へり

ウルレムスビルグの戦は敵軍の損失を甚ど大なる事よて  
數へ難し尤も彼等勇を振ひ必死の戦を爲して困苦を極め  
さるるも之を見さる證人タライビ（隊の頭取）の書狀よ  
明かり

其文よ云く敵兵ウルレムスビルグを退きさる時よて手

負人の満さる寺社學校諸役所を其儘よして立去より又  
手負人を乗せさる車を遁出しされど昨日合戦のありし  
所よて悉く我鐵炮よ撃破られさり此時予の見さる最  
も哀むべき有様もヘンヌクの陣所よ近き畑よ横れる八  
十二人の手負かり又ヘインテルマンの陣所よ近き病院  
よも手負人夥しく入込み其中窓の下よ切離されさる手  
足數多捨去り且其屍累々乎として窓際よ及びり亦府内  
よも六百人の手負人各己の外科よ頼て療治を受さる有  
様かり然れども火曜日の六時後よも其外科大抵遁去り  
て僅よ兩三人残れり此手負人も皆熱を煩ふ者の如く甚



と渴すると見へて水を請ひ哀れある聲よて何日醫師來  
るやと尋る計あり斯く苦痛せる者の傍よも既よ息絶と  
る者も横り其餘も苦みて皆息絶へたり

予等敵軍の追來るを防んとて設けたる十三の砦右より大  
將ヘンコクの銃鎗を以て攻寄せたるもウルレムスビルグ  
よて戦争中の最も盛あるものとす尤ヘンコクが不意に敵  
砦の右よ顯むれ大炮を打掛たる時を勢盛んある敵の軍兵  
も大に辟易して之を防ぎ砦を全ふするに能はず此時最早  
午後よて我軍兵等も大雨の頃沼澤或も深林を越へて進み  
ければ身を露し且兵糧乏しくして疲れたり

但午後五分時よと予等敵の大砦を去る僅六十ヤード  
よて數十の鐵炮を打掛け又數十の軍勢を以て敵の本陣  
よ退く道筋ある北方の深林よ向て打掛たり此時大將ヘ  
ンコクも歩卒よ下知して軍列を整へ原野の所よ備へ  
たり

又敵兵の捨去する砦よも我旌旗翻騰として飄りヘンコ  
クの率ひする歩兵も列を正して大將の下知を待てり合  
圖を呈する將士第三砦の胸壁より合圖を為す旗印も遙よ  
ペーデ砦の火烟の中よ在るを見る又是より遠くフリーケ  
ルが指揮せる軍兵等敵と戦ひて既よ耐あるとも鐵炮の



響と白煙の颯るよて知るべし予未だ斯く盛んなる戰場  
の有様を畫りきよるを見ず又ヘンエクダ大炮隊より  
一時の間速く打出せしぐ之は當らざる者なり敵岩より  
も我兵は向て打出せると少ふらず敵の歩兵をフリーケ  
川の兵と戦ひしぐ我兵隊未だ急な敵岩に攻寄するに能  
もされど敵方より打出せる炮丸の多く中らざる地は陳  
取して敵の歩兵寄來るを待受たり頓て敵兵速く押寄せ  
しぐ之は先どちて軍事は達せる人の心付し畏るべき事  
あり四時後半時の間も合戦忽ち歇て戰場殊に寂然たり  
我右軍も是と對せる敵兵も皆勵戦ふと云く唯右軍より

少く銃聲あるを聞くのみ故に我軍中よても敵兵疲れて  
退きよると思ふ者多けれど或人云く此の如く勵戦へる  
敵兵の俄に引退きよるを實に畏るべき事よて必ず我不  
意に出て襲來るとあらんと云り果して敵の騎兵一バタ  
イロン不圖深林中より我右軍へ攻掛れり且其左右よそ  
之を接くる爲に歩兵三レジメント隊あり其勢實に畏る  
べし

一年前よもビルリエンよて敵の歩兵四千人不意に寄來り  
て我兵一萬八千人を撃破りよる事有り然るよ今も我新  
英蘭人も亦善く戦へり眞に大將ヘンエクダを此危急に當



べき名將あり此名將を我歩兵をして寄來る敵兵よ向ひ  
一文字よ備へしれど敵兵を益勇んで進來りければ我兵  
より一度よ五千挺の鐵炮を打掛とりされども敵兵を益  
迫りて我兵を鑿よせんとする勢あれど列を亂して我兵  
の前二百ヤルヅよ近寄れり此時ヘンヌクも己の勇猛ふ  
るを衆人よ示さんとして己の帽子を取り士卒よ下知して  
汝等小銃よ玉藥を用意せよと云けるが頓て我軍兵盡く  
進み敵よ向て打掛する勢恰も鎌を以て穀穂を刈るが如  
し故よ敵兵大よ混亂して若の後よ退きより故よ我兵終  
よウルレムスヒルグの戦よ勝利を得たりされど此時大

將へインタルマンを援くるとかく或を來援くると甚よ  
遅りりし諸將む之が爲よ汚名を蒙る有れを能之を熟考  
すべし總大將マクケルランも戦の鎮る後漸く此よ來れ  
り彼若五時も早く來らむ此日の合戦全勝を得るからん  
されむ古代のナボレヲンも常よ我陣前よ在りし

ウールレムスヒルグ戦場の事

ウールレムスヒルグの戦を敢て勝利を得んとよもあらず戦  
疲れて退くとせる我兵を援くる為かり故よ敵兵此戦よ  
敗北しされど亦少を彼の望を得るともあるべし又大將  
ヒム子ルを何の故を以て大將フリーケルよ援兵を送れると

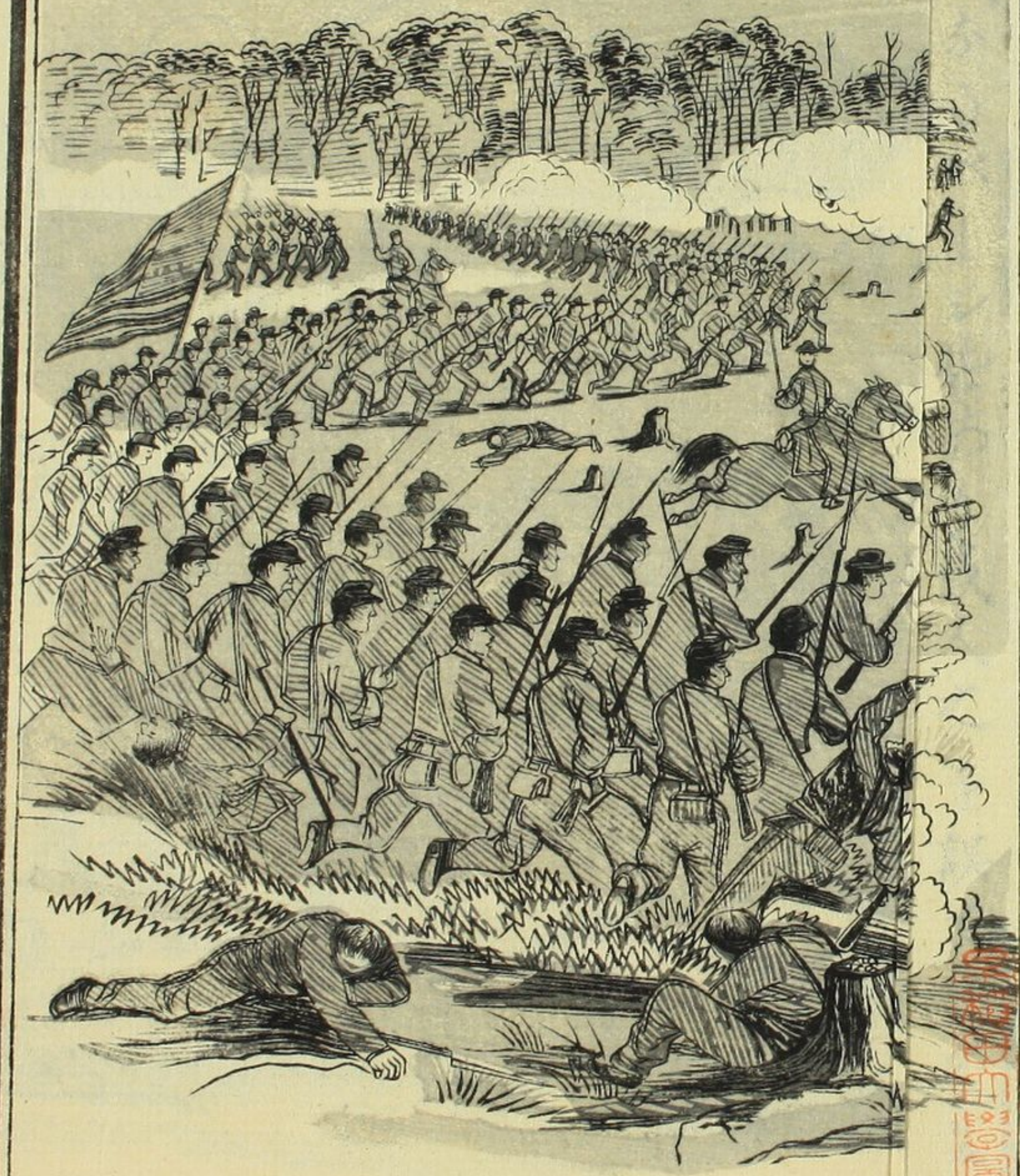


遅うりーや必ず吟味を受るとあらん

予等多くの告文中より此大戦の最も切要なる所を撰出して左よ記す

ウルレムスヒルグの南二里よいてアダムスと云へる人の別荘あり第五月三日の夜大將シム子ルヘイン左ルマンケイス及び之よ次く諸將等此村家よ陣取りとり翌日の早朝よ至り敵陣を悉く探索せしよ敵の防禦も九砦あり其四も占士河よりウルレムスヒルグの柵道よ至る迄列らふり其一もウルレムスヒルグよ進む道筋を防ぎ其四も柵道より占士河まで列らふれり又アダムスの別荘を距ると半里許

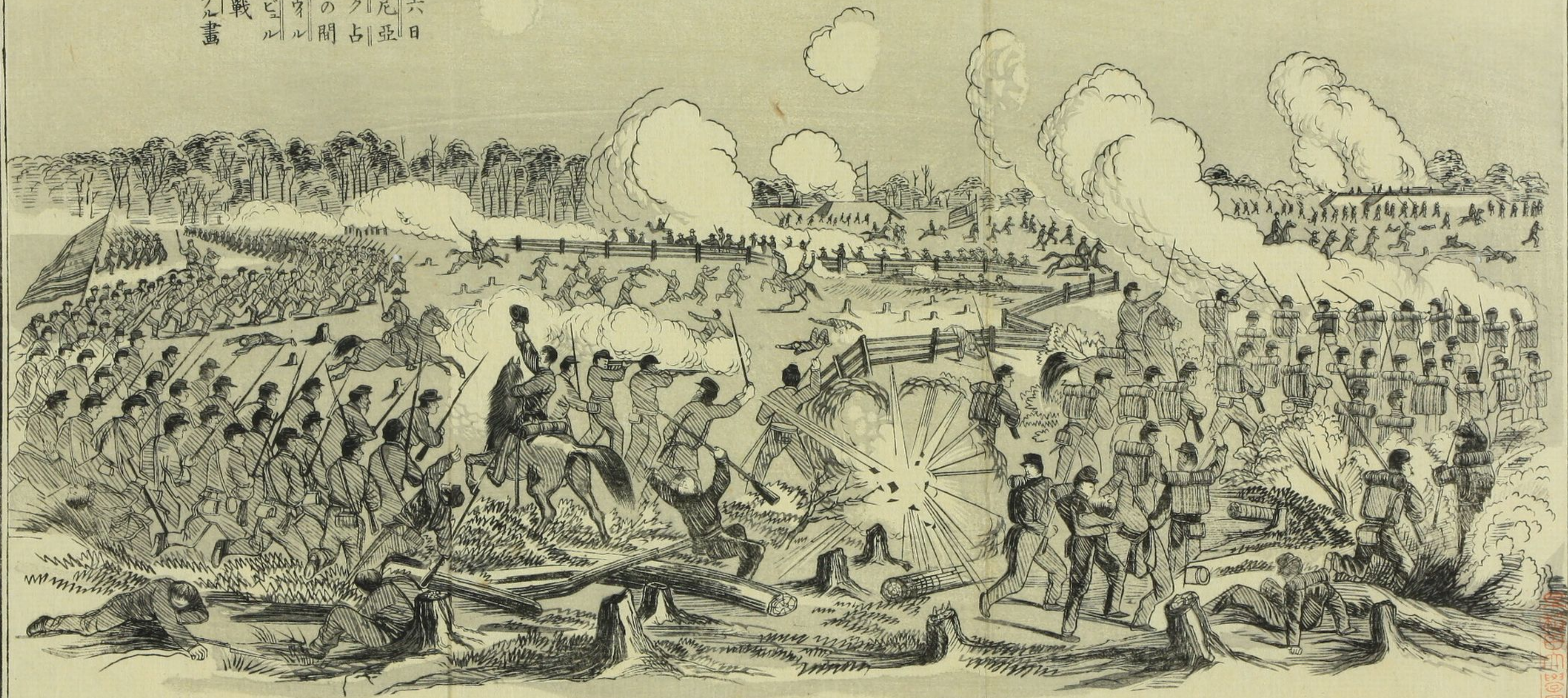
第五月六日  
費爾治尼亞  
のヨルク占  
士兩河の間  
よあるウル  
レムスヒル  
グの大戦  
ゼバスケル畫



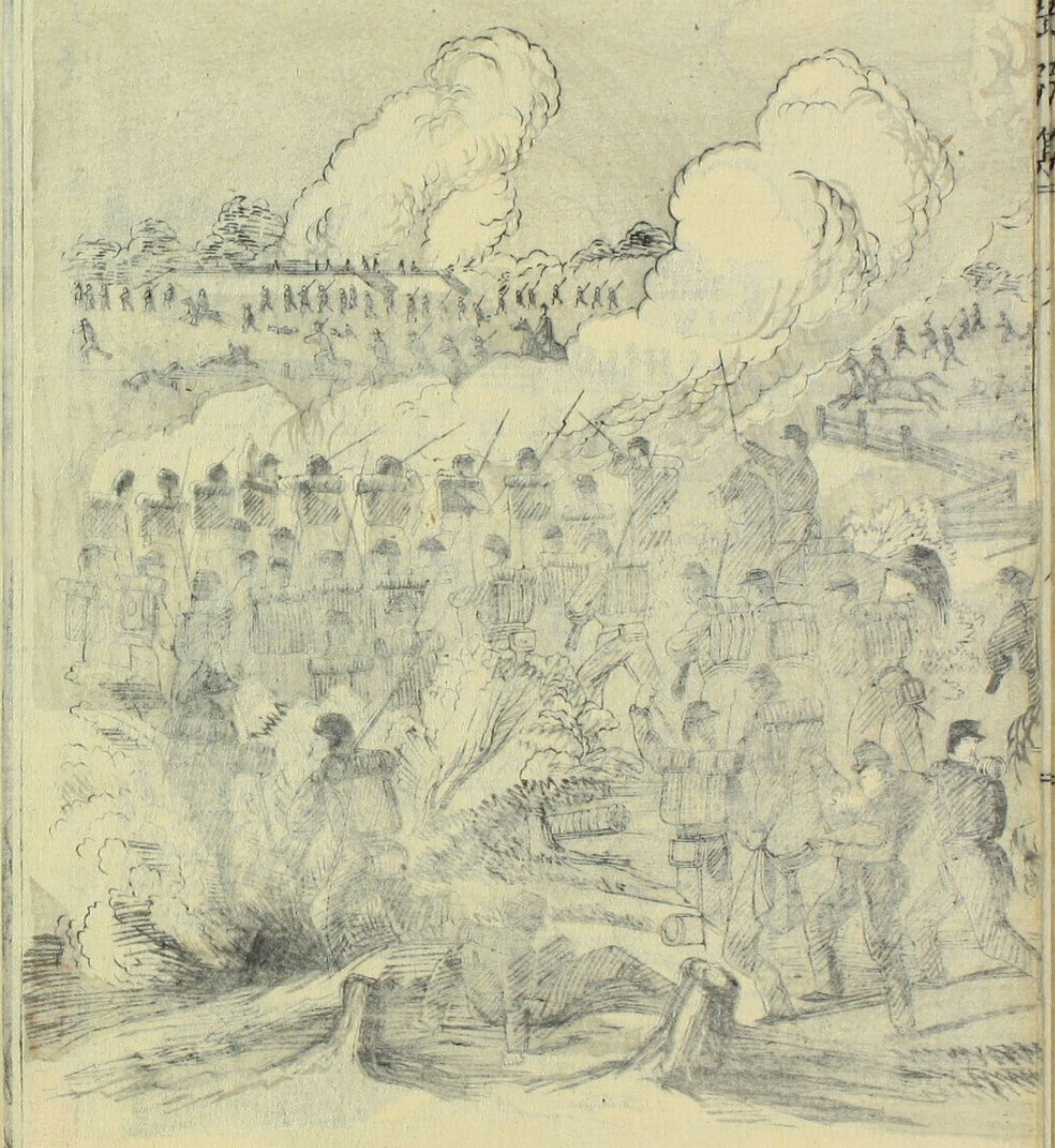


一とウルレムスビルグよ進む道筋を防き其四も柵道より  
占士河まで列らふ水り又アダムスの別荘を距ると半里許

第五月六日  
費爾治尼亞  
のヨルク占  
士兩河の間  
よあふウル  
レムスビル  
グの大戦  
ゼバスケル畫







よして敵の根城ふるページ砦あり或人之を誤てマグリウ  
ドル砦と名けたり此砦も高地に據て他砦に迫らんとする  
有様恰も鍵の如し又アダムスの別荘より二三百ヤルヅに  
して小河の岸邊に續きたる深林あれども戰場を長三四里  
廣半里ある小丘あり目を遮る者なき廣場にて半を麥を種  
付たり故に戰場の形狀を畫くは最善き所あり其中央を陣  
所の前面に當れり又戰場より北方ある敵砦之後にも亦深  
林ありて唯イルレムスビルクに近寄り所のみ其缺けたる  
所あり

同我兵を先に進める事



早朝より第一大將ヒム子ルも我兵を指揮せり尤先より進め  
る大將スミット及びフリーケルの指揮せる兵隊より騎兵且  
大炮隊之より添へり又コウチ及びヒゲリーの指揮せる兵隊も  
此所を距る數里よりして所より陣を取り先より進む兵の後備  
を爲せり此時一萬八千人より過ぎざる兵卒等夜間深林より入  
込みて敵兵より對せんとせしが是より難きとあり

朝日の昇る頃深林中より兩陣より互より鐵炮を打合けるよ  
敵砦より時々破裂丸を打出せり是より於て我諸將等相議し  
先偽て敵砦の中央を攻め其後急より左右より押寄せて奪取  
らんと約せり九時より及んでフリーケル兵を進め深林中より到  
り廻路を爲し先我右より在る敵の小砦を攻め夫よりページ  
砦の左を攻めんとせり

同我兵鐵炮を列ね戦備を爲す事

フリーケルの兵も殆ど通行し難き路を進み占士河を距る一  
里許よりしてコルレジと云へる小河を渡り敵の小陣屋前より  
在る深林より入込みたり此時我兵隊の陣取せる有様を下より示  
さん

左より大將ゴローフルの指揮せる第一第十一第十六馬渡

朱些斯ブリゲード隊且第二中舎布什爾ブリゲード隊あり

中央より大將シクレ人の指揮せる紐約第一第二第三第四



第五エキセルシラルブリゲード隊あり

右よを第五第六第七第八馬遮爾三ブリゲード隊あり此所  
よブラムハル及びスラムトの率ひとる大砲隊あり此兵隊を  
林際よ進みて不意よ鐵炮を打掛け大よ敵を驚うしければ  
敵若より打出しされど我兵深林の蔭よ在るを以て大害を  
受ざりし

十二時の頃を我兵曠野よ陣取して一度よ敵若を攻むる用  
意を爲せり折しも敵の小陣屋防禦の兵甚ど少ふければ我  
歩兵進んで鐵炮を打掛けし其守兵等皆大ふ恐れれてペー  
ジ若の前後よ退きさり此若よと敵の大軍集りて頻ふ大砲

を打出し且若後の林中及び左右の曠野よ歩兵騎兵大砲隊  
を備へさり時よ我大將フリーケルの縦隊を先敵若の中央を  
攻め夫より其左右よ轉せんとせり

其外終夜の暴雨を侵して進み戦ひしとも恐るべからず

同エキセルシラルブリゲード等の事

林中及び林際よて戦の方よ酣ふりし時我エキセルシラル  
ブリゲードをよび紐約第七十客兵を最力戦して大よ兵士  
を失ひエキセルシラルブリゲードのみよて死傷凡五百人  
よ及びり一時の頃大將ペンキのブリゲードをリリースミルス  
より十二里の間暴雨を侵して進みけるよフリーケルの兵既



よ戦勞れされも大將ペッキのブリゲードを前備と為せり其  
 後二時の間勇を奮ひて決戦一二度まで敵兵よ攻付られ  
 ぐ終よ我備へ一地を退くとふ一折も邊西威業の弟百二  
 ブリゲード敵を目掛けて真先よ進み鐵炮を打掛けて退や  
 否同第九十八ブリゲード之よ代て進戦ひけれも第百二ブ  
 リゲードも再び進み力を合せて戦ひたり此時デトロブリ  
 アンドの卒ひさる紐約第五十五ソウアラスを左方よ進み  
 暫らく戦ひて引退き紐約第六十二兵隊を敵兵を遮り右第  
 百二および第九十二兵隊を横間より敵兵よ打掛けたり此  
 時紐約第五十五兵隊を陣を立直して第六十二兵隊を援く

る爲よ進み且邊西威業の第九十三兵隊進みて道路よ臨め  
 る敵の炮臺よ鐵炮を打掛け遂よ敵兵を諸方より追出せり

大將ヘンコック率ひさる兵隊及び戦功の事

大將ヘンコックを兵を率ひて敵砦の横よ進む命を受たり其  
 兵を威業翰清第五編第六邊西威業第四十九紐約第四十三  
 ブリゲード隊ありエイリスモットの指揮せるも大炮隊の一  
 部および鳥遮爾些の第一レジメント隊よて總計四千七百  
 人かり此時ヘンコックをフリーケルの戦へる處より二里許隔  
 りて陣を取れり此兩將の間よもペーリ砦及び半里毎よ敵  
 の二小砦あり又ヘンコックのブリゲード隊を一里許險阻お



る路を経て敵兵左端の北ヒフチエクルヘルトに進めり  
 爰も敵兵ヨルク河よ落る小川よ狭き土手を築き且其土  
 手よ對して畏るべき備へありされど我兵恐る色なく直よ  
 其土手を越へて敵の胸壁よ登り僅二三分時の間よ我旌旗  
 を其高五十フートの地よ翻すよ至れり敵兵も既よ我兵の  
 近寄るを見て皆逃去より此よ於て我兵士も一齊よ凱聲を  
 揚げ左よ向て急よ進み狭き路を三百ヤルツ程行きけれど  
 忽ち戰場よ出て遙二里を隔て彼方よフリーケルダ敵兵と戦  
 ひ且其敵砦よりフリーケルよ向て大砲を打掛さるを見たり  
 我兵と敵砦との間よ亦敵の二小砦ありけるが其守兵も我  
 兵の進を見て速よ退き其大軍と合せり

此時日已よ一時ふりーダ大將ケイス馬よ鞭うちて馳來り  
 ヘンコクよ云ひけるも予士卒を指揮する爲よ來るよ非ず  
 我兵敵砦の左を攻むるを見んとあり頓てヘンコクの兵進  
 みけれを敵再び小砦を捨て退きより我兵忽ち其中よ進入  
 りて我旗を揚げより其外我兵とペーシ砦の間よ一小砦あ  
 りて敵の散兵其前面よ備へり是よ於てハンコクを八砲車  
 のりムブル砲車の一を外部せて發放の備を爲し相  
 距ると六百ヤルツあるペーシ砦よ向ける五秒時の間頗よ  
 打掛より折しも陰雲西方より晴渡り白日燦々として戰場



よ輝けり其有様實よ美よして且恐るべし何とふれを敵よ  
り奪ひて我旗を揚げたる若あし又ヘンコクのブリゲード  
を戦備を爲し火煙よ包まれたるベシ若も其中よ聳へ此  
と同じ方角よを白雲の中より絶へず火焰を噴出し彼此數  
千人の軍勢等死地よ入るうと思ふぞうりよて大小炮の響  
き絶間なく貫よ死亡の祭日よも喻ふべしヘンコクの大炮  
隊も一時餘の間早打よ發ちけるが敵若よりも之よ應して  
打掛とり而して三時半頃少く戦の休時ありて譬へも暴  
風雨の來る前よ物静るふるが如しされど四時よ及んで敵  
の騎兵寄來り又左右より其歩兵三レシメントを組み列を  
を正して進來れむヘンコク之よ對して歩兵を備へり此時  
敵の騎歩兵も我兵を鑿よせんとする勢よて攻掛り我大  
炮の火焰を恐れず一人僵るれむ他人之よ代て進み既よ近寄  
されむ我歩兵鐵炮を打掛とりしよ敵も少も恐る色なく益  
近寄とり故よ再び雨の如く鐵炮を打掛し猶進むと止ざ  
れど敵も我兵を鑿よせんと思へるとぞ見へふける

我兵士悉く裝藥せる事

敵兵の我前二百ヤルヅよ近寄する時大將ヘンコクを馬よ  
來り進出て帽子を脱ぎ兵士よ向て裝藥せよと命せり其聲  
未ど終らざるよ我歩兵敵を目掛けて進み手誥の勝負とか



り銃鎗よて決戦し勇を奮ふて叛心と忠義との勢を比しこ  
り頓て敵兵大に敗れて退きければ我兵勝よ乗りて益進み  
終よウルレムスビルグの戦よ撃勝より備も瓦得路の大戦  
以後も一度よ大勝利を得よと此戦の終よ及んで大小炮  
を打掛よる勢よ過る者ふと遂よ我兵も其翌朝ウルレムス  
ビルグよ入込よる

敵兵人数の事

此戦よ出よる敵兵の数を甚と知り難し我兵の主捕し者も  
其數或も二萬或も三萬許と云ひて駭とよる説ふしされ  
ど凡此戦よ出よる敵兵を大將アンデルソン北格阿利納第

四第五第六第九レジメント隊を率ひて一ブリゲード隊を  
成し大將ヒル費爾治尼亞第一第七第十一第十七レジメン  
ト隊を率ひて一ブリゲード隊を成せり又祿細亞那第十四  
雅拉巴麻第十四レジメント隊且ウルクスキスの率ゆる全ブ  
リゲード隊雅拉巴麻第四第六第八第九第十第十一第十二  
費爾治尼亞第二十四福落里得第二祿細亞那第十四第十七  
密斯昔比第十九レジメント隊各加りよる尤其終の三レジ  
メント隊も大よ手負討死あり密斯昔比第十九レジメント  
隊も其數千五百人と云へる者よて大將ロンクストリート  
の指揮せる兵あり又大將イールレーインス兵を率ひ或



もジンストニ自うら兵を率ひたる説あり又マカサスの戦  
よて有名ふるラダムの大砲隊も亦其中に在り

死傷員數の事

ウルレムスビルグ合戦の如く銃鎗の鋒よて得たる勝利を  
雙方共よ手負討死の者多うらざるを得ず

敵方も手負千零々五人討死五十人其外よ生捕らるる者五  
百人尤討死の中よえブリゲザール、ビチラール二人および  
横隊將校數人あり

我兵の損失も亦少あらず殆んど敵と同様あり我將士よ  
も手負討死の者數人あり且エキベルシオールブリゲード隊  
の將士二三人生捕られり

大將ビトレルの巴里庭莫よ入たる時敵方の紐呵連尼斯新

聞よ之を誹りて云くヒドレルをケレスセントレチー加福里

名の府のシントカルスと云ふ旅館の近邊よて小店を開きピ

ケイユ子ヒトレルと名けり剃工ありと此度ビトレル紐呵

連尼斯よ攻入りされを既よ己を誹れる人よ害を為すや否  
計り難し

密斯昔比河口大戦の事

斯よ密斯昔比河の大戦よて紐呵連尼斯の敵砦を撃破り合  
衆國南部の都も再び北部の手よ落ちたる事の告文を多く



得たり折しも早朝に敵を數若く二百挺許の大砲を備へ水  
 底よを鐵鑽及ひ多くの舟行を礙ゆ可き柵を設け且其力量  
 何程とも度る可うらざる鐵張船を多く列ね近頃發明の力  
 を極めて防禦し地獄の責めも斯くあらんと思ふ許りも怖  
 しき備を爲しけるが我軍艦を少しも懼る氣色なく其間よ  
 進みよるふを實に豪勇よして其有様を寫し得るとも能て  
 ざる勢ひかり諸千八百二十二年第四月二十四日の早朝よ  
 も朝日と共に輝ける此軍艦を再び見るとも實に心地よ  
 とも稱すべしされど昔西班牙人ぞ日巴拉大を攻め納爾森  
 がタラハルガルよて勇を奮ひ哥本哈干よ寇して火攻よ  
 コミンハーゲン



第四月廿四日北部  
 軍艦の第三隊敵の  
 ヒリテ若前と過き  
 進む圖  
 ウレムウラド画



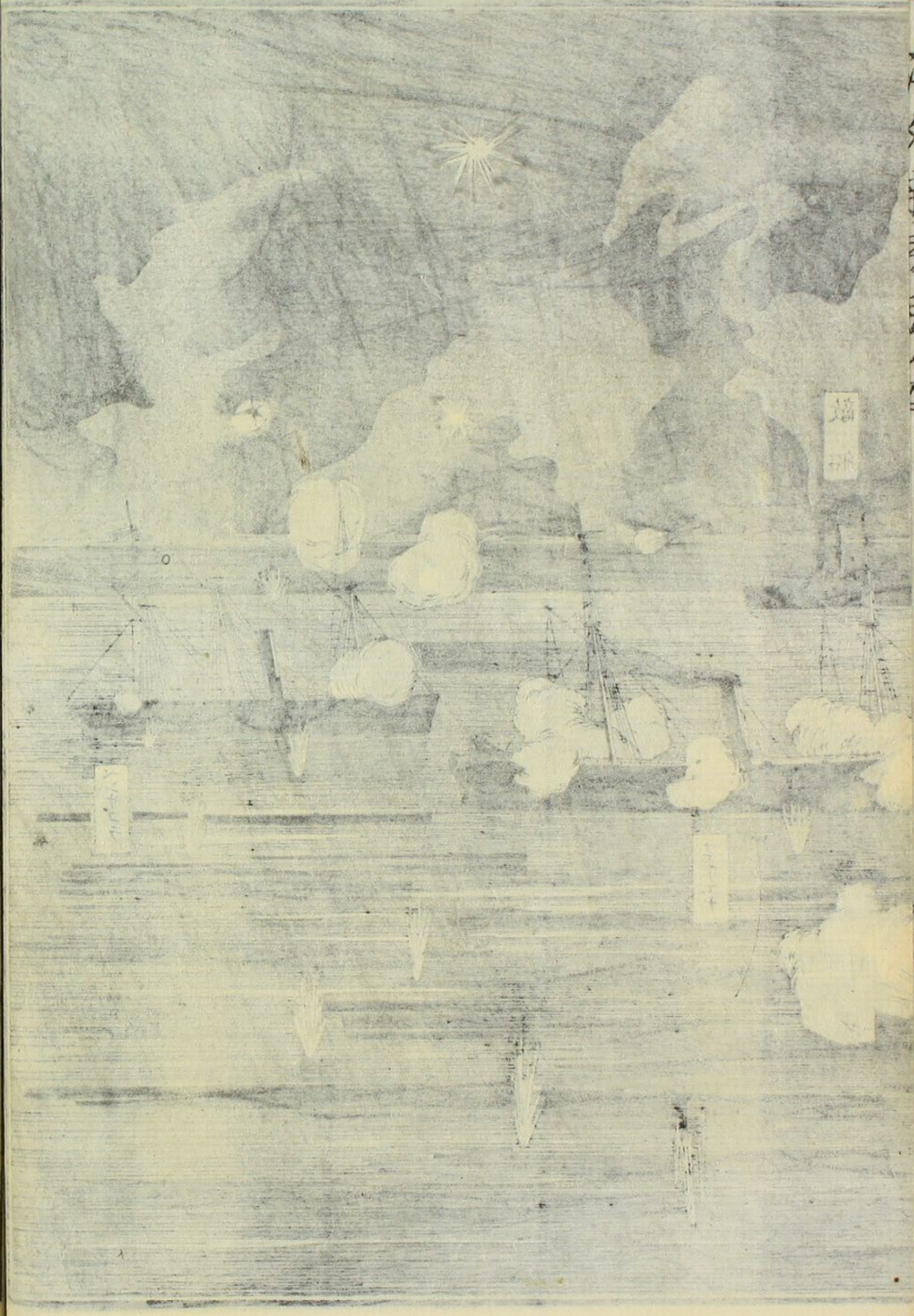
第四月廿四日北部  
 軍艦の第二隊敵の  
 ヒリッダ岩前と過き  
 進む圖  
 ウルヒムウラド画



とも稱すべしされど昔西班牙人ダ日巴拉大を攻め納爾森  
 ガタラハルガルよて勇を奮ひ哥本哈干よ冠して火攻よ  
デナラタル  
チルソ







此の戦杯を此戦より比すれども云ふに足らざる所あり今セク  
 ソン若の火炮のみよても昔時大尼<sup>デニマルカ</sup>が軍艦を半時の間よ海  
 底へ打沈むべく今コモドルポルトルが珍奇ありとて破  
 損おく奪取んとすれども遂に破損よ及びこのホルリンラ  
 ムの船種の名のミよても昔時納爾森が率ひこの軍艦又を佛郎西  
 の全軍艦と相敵するよ足るかるべし  
 我軍艦も常よ牆及び他の船材を緑樹材よて蔽ひをふし船  
 腹側底よ泥を塗り大なる錨索を船よ絡ひ敵方の火炮手を  
 して目當よするよ宜うらざらしめ潛よ兩岸の敵若炮艇鐵  
 張の浮臺場又異形あるラム船の間を過きしと覺へしが忽



ち我白炮船より打出したる破裂丸を天を掩ひ敵船の上より  
降ると警へも平野の天府は雨ふり又も南西の大河北密河昔  
指ふての底より旗得納山の破裂して火漿の所より散亂す  
るが如し

偕も其人數夥しく勢猛けき敵軍を襲ひし我軍艦の勢を實  
に極て盛なりしとぞされど指揮官の云へる如く多しナ船  
を敵船および炮臺の巢中に入り込み敵船より打出したる炮  
丸を避け逃るゝを恥辱とし力を極めて船の雙方より敵に  
向て炮を打掛け大に敵の害をふし今も我船の甲板より水押  
入れども止むる氣色もなく打掛く攻けれを終り我船を

海底より沈みけるる勇氣を歴史中より記すとも其實事  
を詳し盡すを得ざるべし

畫工を工みよ寫出すとも筆頭の技ふれむ其戦場の模様を  
寫すのみよて其場の心地よき趣を寫すを得ず若も我國歴  
代の戦を工みよ畫く人あらむ此密斯昔比河の大戦を畫く  
んよを必ず力を盡さざるを得ず

我軍艦敵艦の前面を過ぎしと及び多リユナ船の力戦の事  
を甲比丹ホルトル及びボックスの告文よて詳し此下より載せ  
たり

敵艦我兵より降る事



我軍艦敵砦を過ぎし翌朝予敵將コロ子ルヒギンスに書を  
送りて盡く其砦を我兵に渡し降参するを進めけれども彼  
之を承允せず

廿七日に再び降参を進むるの書を送りければ翌廿八日  
敵將より遂に降参の返書を得たり乃ち兵を率いて上陸し  
數砦を受取り且此度敵の降参に就て數箇條の盟約を取極  
め此數砦に北部の旗を推建てたり

然れども此敵兵等の力を盡して砦を守りたる忠義を最も  
尊敬するに足るべし故予此數人を取扱ふに最も心を盡し  
たり

右戦争の時敵の三蒸氣船をゼケミタルの指揮する所おれ  
む其砦にある敵將も此船に關うらざるを以て其將士の所  
爲を我が知る所にあらずと云へり

予又敵砦の將と暫時の間互に戦を歇むるの證として旗を  
贈りし時上に載せたる敵船の舟人を十六挺を備へたる鐵  
張の浮臺場を上流の一箇所に牽上げたり其後予ハルリー  
トレーンの船中にて敵砦の將と降参の事と付數箇條を取  
極んとしたるに折しも敵を浮臺場より火を掛け我船に向て  
流さんと告ぐる者あれど予又降参したる敵將に此浮臺場  
を多く火薬を備へたるや又も火薬を込めし大炮を備へし



るやを問ひければも彼も海軍將士の爲すとも嘗て知らず  
と答へたりされど敵砦の將も海軍の將を卑むと見へて  
うくも對へりあるべし是よ於て予敵船を見廻る人を命し  
降參せし敵將と絶へず會議しとり兎角する間敵の浮臺  
場も我船よ向て流れ來りしが既に熱氣增長して炮も破裂  
し丸も河上よ落ちたり其夜の二三分時を歷ると覺しき頃  
浮臺場破裂し其碎片河上よ散亂しヒルプ砦中の一人を傷  
きたり若此浮臺場をして我船よ近づき破裂せしめむ我船  
を必ず之り爲し盡く破損して微塵とふるよ至らん又予敵  
砦を奪ひし後ハルリートレーン船よ打乗り敵の蒸氣船よ

向て進みけりよ其一船も猶敵旗を揚げたり予直よ此船よ  
炮丸を打掛けよと命とりしが速よ皆降參せり其船中よ  
も海軍將校數人及海軍大砲隊ニコムペニーあり

予斯く敵を降參せしめ暫時戦を休むるの證として既よ我  
旗を贈りたりよ今又我船よ向ひ戦んとしよるの罪を責め  
て其舟人を捕へ北方よ送り此戦の全く終りし後其罪を吟  
味せんとす其他予猶數多の事を行ひされども其告文を後  
日を待とんとす

予其敵砦を大將ヘルフスよ託しとり此時ゼクソン砦も破  
損甚と多うりし予又此砦内よ千八百餘の破裂丸落ちて發



しる話を聞けり又之に次く若く速く修復して防禦の備を為すを得べし

斯く敵將の降る時我海軍の士を敵の一炮艇を沈めたり嚮く奪ひし一蒸氣船も今現く用立とれども更く又今奪ひし一蒸氣船も我用に當てんとぞしりける

予強て敵を降参せしむるを速く此若を得んと思へども此戦に我兵卒并に若中の諸品を破損せずと雖も城壁及建家を白炮の爲に皆損しり

千八百六十二年四月廿九日合衆國船ハルリートレーンにて謹て書す  
艇隊指揮ドドポルトル

總大將ドゲスラギットに呈す

甲比丹ボグスの告文

廿四日の早朝に予らしナ船を指揮し敵の炮臺を過ぎしに圖らずも我船を敵の蒸氣船巢中に入りしを見て其艇及炮門より打掛けしめしむる最初艇上より打出しし炮丸の中りし敵の蒸氣船も多くの兵士乗組みしりと見へし此時敵の蒸氣艦を破裂し其船を岸に近く浮ひしり三蒸氣船も同ト有様なり其内一艘も炮船ありしが此炮火に遇ひて漂ひ岸に近寄りて終に破損せり

早朝六時に我らしナ船に敵將ベノルレイケンニオンダ指



揮しとるモルゲン船は襲われとる其船の胸腹を鐵にて覆  
へり之より打出せる炮丸も正しく我船の網階子に中りて  
之を為し死しとる者四人手を負とる者九人ふり又其船よ  
り打出しとる炮丸も<sup>部</sup>クルトル船の<sup>部</sup>名一及び舷  
に中りけるが味方も少しも恐れず其敵船に向てハイ  
ンチの破裂丸三發をよび舷内に細線ある炮より數丸を發ちて  
大に敵船を打破り猶此敵船と戦ひけるよ一の鐵もて覆ひ  
とる敵船より復發てる炮丸我船の網階子に中りて大に損  
トとり此時我船よりも打出せる一の炮丸敵船に中りて退  
飛するむろりふり再び敵船より打出しとる炮丸右同所よ

中りされとも速に我船を旋轉せしめ敵船と相並びし頃我  
船よりハインチの破裂丸を五發程打出しければ快くも敵  
の船中より落ち發しとる之よ由て敵船を燃上り岸に近く浮  
ひより折しも我スリユナ船の沈んとしとるを見て之を岸  
近く引寄せ錨を投し一樹に固く結付たり

此時我船の炮火始終烈しければ敵のモルゲン船之を恐れ  
蒸氣を強くし逃んとせしとるけり

我スリユナ船を其炮臺に水の及ぶ所まで炮丸を打掛たり  
此時予船中の手負人及舟夫等を他船に移さんと注意しと  
り甲比丹リーの指揮するヲ子イダ船を<sup>部</sup>クルトル船の様子を



見より早く之を助けんとて進來りければモルゲン船  
遂に此船に降りしが其時既に炮火にて燃上りたり  
予其後此敵船の死傷五十餘人も指揮官の命にて船と共に  
焼捨てたりと云ふを聞けり我よりユナ船の兵士を船を助  
けたる働及び斯る危難を侵して恐れざる勇氣と云ひ且二  
度まで破裂丸の爲に船を焚れたる有様を考ふれども予等が  
施す大なる賞賜も猶其大功に酬るに足らずと思われり  
其後十五分時に至りて遂にユナ船を海底に沈み唯船  
首の最も高き處のみ水上に出たりされども將士も皆其所持  
の物を失ふに至りける是故に予貴局より此損失に心付て

此度戦死の人々も相當の手當を惠まれんとを願ふ  
又手負人も速に此所へ來れる船に打乗せ今も軍艦に悉く  
之を配分せんとし先數人をペンサゴラ船に移したり予又  
後炮門を司る第二等の少年ラスカルペキが勇を顯し  
るを以て殊に其功を賞するに足るべきを貴局に告ぐ此  
の如き功名を海軍學校にて厚く賞すべし縦ひ海軍も皆新  
よ抱へし者ふれども其勇實に賞するに足るべし我船の炮火  
にて敵船の炮火の勢衰へしれども敵より多く打出して我船  
に害を為すに能わざりし此時我四人の舟夫を手を負ひし  
るが其中一人を深手にて命も危く見へしけり皆我船中危



殆の状稍安全に至りければ即ちアリユナ船附屬の一挺を以て告ぐ

千八百六十三年第四月二十九日北部の蒸氣船ブルークリン細阿連尼斯を出帆する時謹て書す

北部海軍指揮カルレンスボクス

西灣諸口を警衛する軍艦總督ドゲスルラキツト呈す

大將ヘインタルマンの事

此勇猛ふる大將をウルレムスビルグの戦よて昔のマルセル子イとも云ふべし此人の勇よてうゝる勝利を得よるのみならずビルリンの恥を雪ぎ敵の心を恐怖せしめ且我兵

を以て理治門的よ進み易うらむ尤其率ひよる兵卒八千人を大砲を備へよる十五箇所の土手よ向ひ終日食料をも備へず又援兵を得るよふく敵兵と戦ひよる此兵卒を前夜雨よ苦み林中よ卧しよれども厭へる色なく敵砦の炮火よ向ひ力を盡して敵兵と戦ひよるされど人力よ極まりあるを以て遂よ援を後軍よ乞ひよる後軍の兵速よ來りて之を援けよる折しも紅の豪勇ふる大將ヘルリ後軍よありて雨泥を侵して速よ進來り前よ進みよるブリゲード三隊をも越へ來れり時よフリーケルグ指揮せる兵卒の饑渴よ大よ疲勞せるを見よる之をトリブーン新聞紙よ載せて曰く



其時ヘインテルマンを悦ひ堪へずベルリヨ向て速ヨ來  
れるを謝せり而してヘインテルマンも直ヨ其近き兵隊  
ヨ至リヤンキーゾードル等新英人の異名をして敵兵の進み來  
者を防グーめけるが其旗影恰も星を散ヨする有様ヨて進  
めよと下知するや否我兵皆悦んで萬歳と祝ヨり斯ヨベ  
ルリダ率あるブリゲードの三レダメント隊も前面ヨ進來  
りて半里許の横隊を列らぬ皆一時ヨ銃を打掛けて速ヨ進  
み敵兵を銃鎗ヨて追撃し野原より土手の方ヨ退ウーめ其  
最大ある土手中ヨ多く敵兵を追込み直ヨ之を攻破りて又  
敵兵を追出し故さらヨ敵兵をして之を取戻すべき有様を

示し敵兵を引寄せて再三之を撃破れり此戰の終ヨ至り此  
土手内ヨて死ヨする敵兵六十三人ヨ及べり爰ヨ死ヨする  
を大抵土手を築きヨる密執安の人あり是ヨ由て勝利を得  
るヨ至れり

入高の事

今年諸運上の入高を左ニシテ算せる金高ヨ越ウ其府のみ  
ヨても第三月中の入高四百五十萬元第四月中の入高を四  
百萬元あり第四月中品物運上の金高ヨ二百萬元あり此數  
ヨ千八百五十七年第七月の入高を除けヨ一月中ヨ得ヨる  
金高の最大あるものあり此品物運上の入高を去年第十一



月以後百萬元より少きとあり然れとも他年よて一月中入高の中數を四十萬元或を五十萬元と過きず千八百六十一年第四月及び千八百六十二年第四月品物運上の金高を左の如し

千八百六十一年四月を五十八萬一千一百九十九元

千八百六十二年四月を百九十五萬八千七百九十五元あり

爾理鎖那

爾理鎖那を擧げて一部と爲すことと付き議政堂よて一書を出せり此書中よと鎮台秘書官評定所等を他部の如く定むるを載せて之を左の事を加へたり

人あり罪を犯し之を償ふ爲の外を此部よ賣奴を用ふることを禁ず總て此後改めて一部と爲す者も皆賣奴あるを許さずとあり

大將マケルランの事

議政堂よて伊利那倚イリノスローフジイの説よ此度我兵幸よ敵兵を撃破り婆多麥の兵大勝利を得たることを神よ謝すべく且人命を失ふと少くして此の如く大勝利を得たるをマケルランの功あるを以て厚く之を賞すべしと言出せり

ブリガヂールゼ子ラールの事

新よ我兵のブリガヂールゼ子ラールの數を算へたり



其數百六十八人あり其外の二十六人も元老官よて此官よ  
任ずるを待てり

チケホミニー河の事

敵兵敗北したる時渡り逃れたるチケホミニー河も費爾治  
尼亞のハノーフル郡より流出て理治門的の東南東五十里  
よあるゼームストウンの上八里よして占士河よ合せり且  
此河を南よ流れハノーフル郡より右をヘンリコ及びカル  
レスンチー郡左を子ウウケント及びゼームスンチー郡を  
分界とす又此河を大よ水力を用ふるを得べし

紐呵連尼斯城降参の事

此より前よ出たる新聞紙中よ紐呵連尼斯よ向て軍兵を  
差向けたるを載せされむ今略して其軍功及び大勝利を得  
たる状を記す

我軍艦をスルーパ船六艘炮船十六艘白炮船二十一艘其外  
兵糧船番船等猶數多あり第四月十八日よ此船悉くゼク  
ソン及びレントヒルプ敵砦より三里の所よて碇泊し戦備  
を爲せり時よ白炮船を指揮する甲比丹ポルトルも先づ戦  
を始むる前よ好き備を爲さんが爲よアリルタジャンクリヒ  
ツヲル今夕三艘の船を敵砦より二里半の所よ列ねしめし  
り頓てアリルタ船より初て一二發打出しければ敵砦より



も之に向て亦一發打掛けたり時又敵の炮丸を我船に及む  
ざるに五十ヤルツ餘ありしが我船より發ちたる二丸も破  
裂して害を爲せり故に敵兵もバルベテ砲台のより退きて  
其後を唯ケースメート砲台中の一部分にありし炮を發てるのみ此時  
我軍艦も一文字に備へたり其前部にブリゲード船及び炮  
船あり其後よも河岸の樹或も其株に繫きたる白炮船あり  
其備方も第十島よもてコモドールフートの爲せよ異ふら  
ず

### 碇泊の事

我軍艦の碇泊する河を中數一里の八分五の廣さありて其  
水流の疾きと一時間よ四里許あり又敵砦の近傍より下八  
里の間は唯河流の曲折する五百ヤルツの所を除きて廣さ  
五十ヤルツ許の深林ありしが我船を打の妨げあるを以て  
敵之を盡く切倒しとり此林の外も通行すべからざる大沼  
あり又東方も樹木なき濕地あり

### 奇策の事

敵の炮火よも我白炮船の害を受るを避けんとて我兵船の  
檣に常緑樹材を結付け斯くして十八艘の船を蔭多き小亭  
に變し又一の緑樹材を檣頭毎に索を以て結付け其枝を帆  
桁等と相混トて小林の如くせしめたり斯はセントヒルプ



岩を攻めんとて東岸に備へたる臼炮船三艘を上よ云へる  
と異ふる形を作しより此船腹よも泥を塗りて水草を植へ  
敵をして此船を岸邊よある一沼の如く見せしめんが爲か  
り抑新英人も未だ此の如き計を為したるを聞かずと實よ  
獅子已が皮よ代へて孤皮を用ひたるよ似たるあり

敵より初て燒柁を出したる事

十九日の早朝敵兵<sup>コトナ</sup>接得納火山の破裂せる如き勢よて焰々  
と薪を載せたる柁を河上より流せりされど此柁の火勢  
未だ盛んふらざる折我船を水底よ沈めしれも害を受ると  
無し第四月廿三日の朝三時よコモドールヲルラギツトダ

指揮せる軍艦も最も烈しき炮火を侵して敵の岩前を行過  
きとり其軍艦もスループ船五艘炮船九艘あり臼炮船及び  
蒸氣軍艦八艘よて河下よ留まれり故よ我軍艦も敵岩を圍  
みて敵兵の紐呵連尼斯と聲息を相通ずるを妨げしり

敵岩を火攻し紐呵連尼斯よ進む事

第四月十八日より二十四日迄掛りし火攻よ付き猶委しき  
話を載せん折しも指揮官ヲルラギツトも己の軍艦を率ひ  
カエガの甲比丹ベイリー之れが先隊とありて進みしり第  
一隊甲比丹ベイリーヲ指揮する船もカエガベンサゴラ  
ンシビヲ子ーダヲリユナカタデンキヲササヒコンボル



ツモウトあり

第二隊ヲルラギツトの指揮する船モハルトホルドブルー  
クリンリチモンドあり

第三隊甲比丹ベルの指揮する船モシラトイロクイスピノ  
ライタスカウノスケン子ベギあり

第四月廿五日の一時二十二分時に至りて右の軍艦モ名高  
き紐呵連尼斯城の前より列らねたり此時大將ヲルラギツト  
が船より敵若くは暫時戦を歇むるの旗を贈りて降参を勧め  
たり諸此新聞紙を讀む人も予は是より前より出せる最も近  
き新聞紙にて我大將と敵將モンリーと互に手紙を取替へ

ところを知るかすべし最初紐呵連尼斯に進む時我軍艦敵  
の炮台カルムテを火攻せしむる二十五分時の後敵兵之を捨  
て逃れたり

敵若我軍に降参する事

カンデミール灣に碇泊したる船の指揮官も大將ビトレル  
の命にて敵若レントヒルプ近邊の地より兵士を上陸せしめ  
敵の通路を断切りたり其夜ヲルラギツトの命にて敵若の  
下流より列ねたる軍艦を指揮せる甲比丹ホルトルより敵將  
ヲンカンに降参を勧めたり敵將も其若を防禦するに能ま  
ざるを知りて第四月廿八日は己むを得ず我陣に降参し



り此時も砦毎よ七百人の守兵あり

敵兵損失の事

ゼクソニンセントヒルプパイクカル多テの砦四其外炮船十  
八艘ラム船三艘浮臺場ブームス水底にありて敵船の名トル  
ペド畧上の具等すを多く失ひさり具名高きホルリンスラム  
及びマナサス船多く炮丸よ中りホルトルグ指揮せる臼炮  
船の爲よ燒棄られさり二十六日よ紐呵連尼斯より上九里  
よ造りさる二炮台我兵よ奪われ二十挺備への新ラム及び  
ミツシシピ船我兵よ奪われんとを知りて自うら之を燒棄  
さり他のラム船アングロノルマンも燒失せり然れども彼

自うら燒きさるや否知べうらず紐呵連尼斯の對岸アルジ  
ール邊よ備へさる浮臺場も同く海底よ沈みさり他の浮臺  
場ルイシアナを敵砦の降り後火藥を以て空中よ迸ら  
めさり又午後リヌンストンおよびパイクの二砦も我兵よ  
降りさり之を以て敵兵を我兵を防ぐの手段全く盡きり  
り

船戰の事

紐呵連尼斯の戰功をへムプトンローツよ劣らず合衆國の  
海戰歴史中よて前日のキムブルランド船と今日のブリタ  
船と二艘の大功を殆んど優劣あうるべし詩人も亦云をん

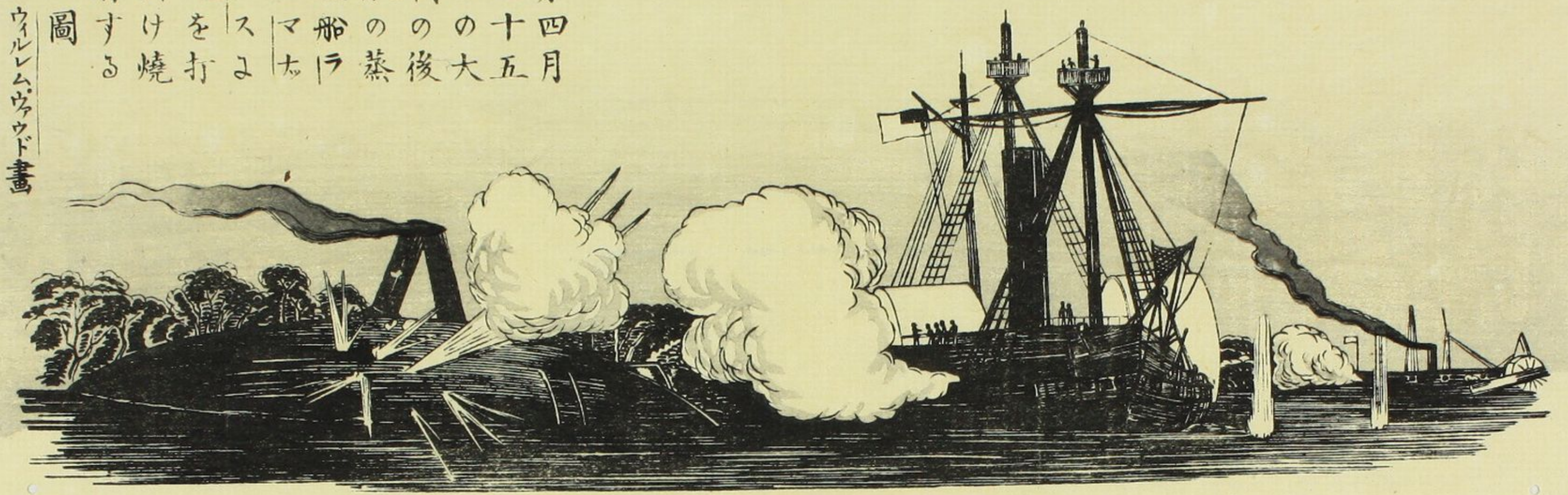






敵の大蒸氣船速より來りてアリユナ船炮門の邊を衝き破り  
 夫より少く我船を離れ一引返し再び衝破らんとて忽  
 ち我船より衝掛り少く沈みたる如き有様を見よりアリユ  
 ナ船ハインチの破裂丸を此敵船より向けて發ちけり敵船

第四日の大戦の敵の蒸氣船  
 サマサママサマ  
 炮を打掛ける  
 打する  
 の圖



ウレムウウド畫

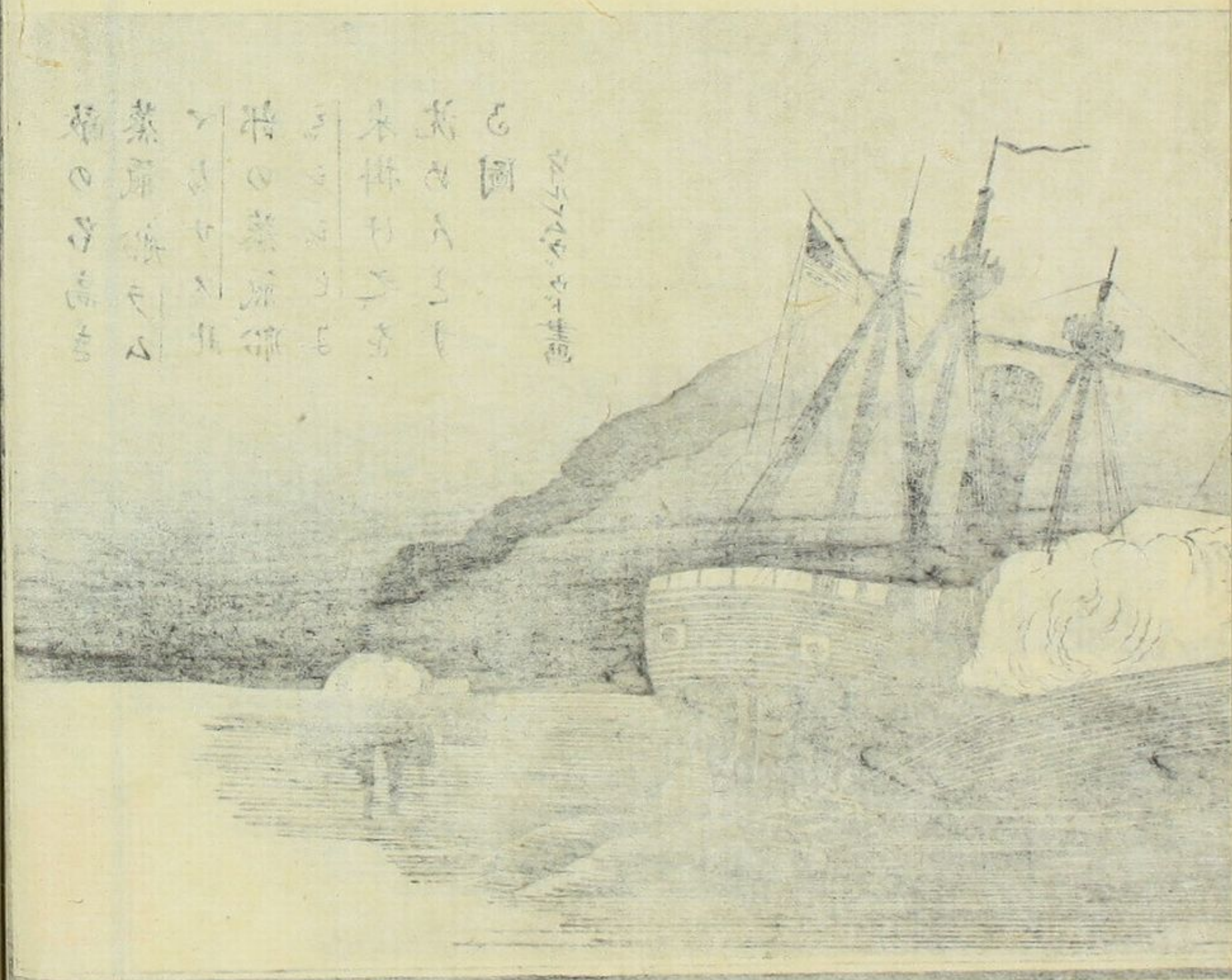
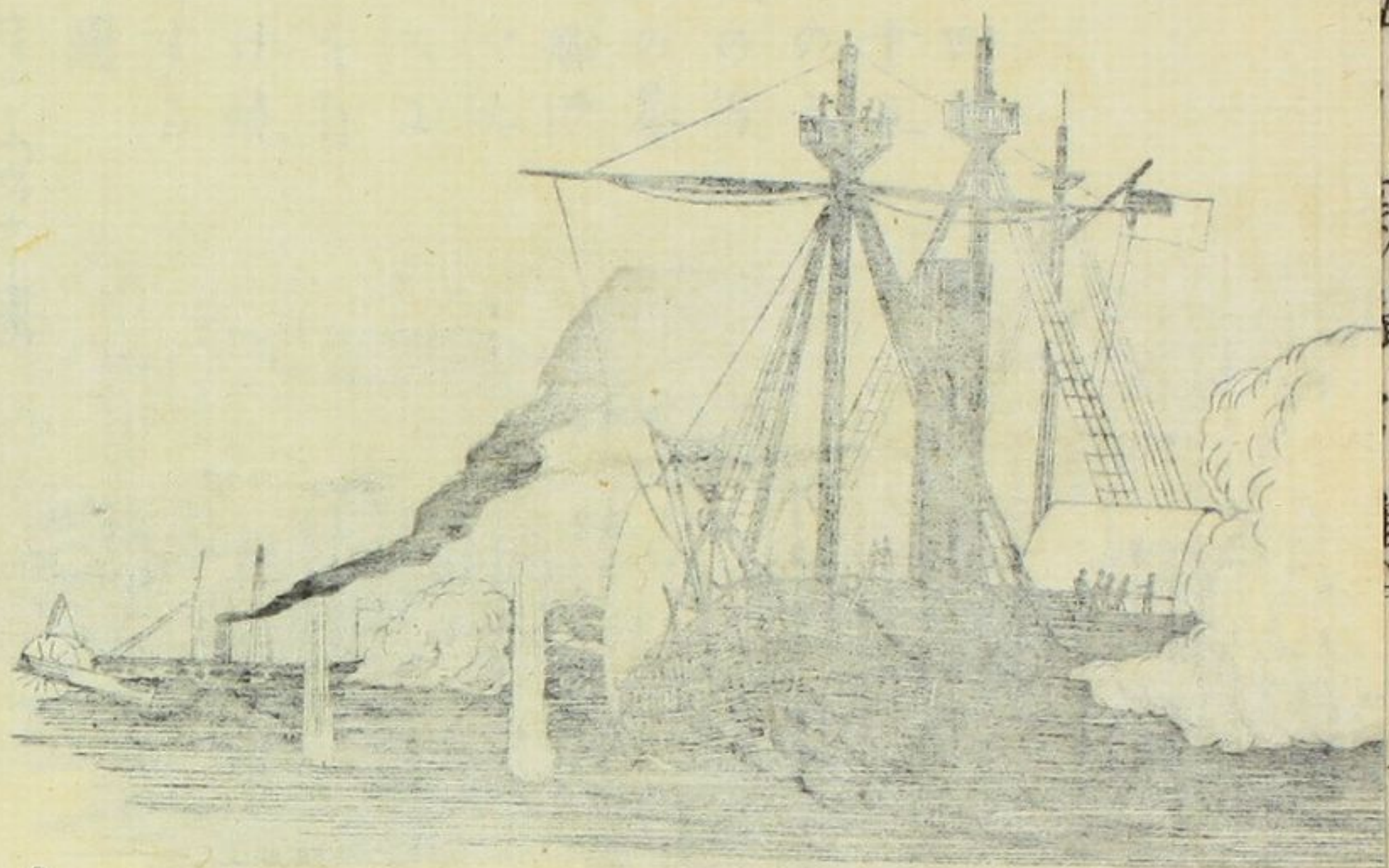
敵の名高き  
 蒸氣船ラム  
 マササ北  
 部の蒸氣船  
 ミンビ  
 乗掛けるを  
 沈めんとす  
 の圖

ウレムウウド畫



大正





此の船は  
 英領海軍  
 艦隊の一  
 隻にして  
 其の艦名  
 曰く「  
 トラファ  
 ルガー」  
 なり

忽ち燃上りて岸に近寄り

ろリユナ船も此敵船の害を逃れ岸に近寄りんとせし時敵

のらウテナントベズルリクンノンダ指揮せる蒸氣船ゴ

ウルソルムール前にもモルゲンと記すも數箇所破損して

河上よ逃延んとしけるをヲ子一ダ船追掛けて終ふ之を降

せり時よ此敵船より火焰の出るを見たり一ダ之を消すと

能をばりて忽ち燃上りたり

ろリユナ船の戦功も此戦の第一たり炮門の一部已よ水よ

沈みされども猶炮を發したり此時甲比丹ボクス其手負人

を助けたり一ダ其餘も盡く船と共に沈みたり此時星及び



横線の旗猶其檣頭よて翻るを見たり

上よ載する船の外よ破傷せしラム船の事

甲比丹ベイリーも河岸の堤よ近づく頃よ他のラム船周圍  
盡く火焰とかりて流るを見たり抑此船も其備へ恐るべき  
有様かり兩側よも各八炮舳艦よ各二炮總て二十挺の炮を  
備へり是も十日餘掛りて造りし者あるべし若此船よて攻  
撃せられむ我軍艦を河より追出すを得べし又此船を稍メ  
ルリマク船よ似たり予謂らく是よりも更よ恐るべき所あ  
りと敵兵此船を河上よ拽上んとせしぐ我軍艦より奪んと  
するを見て終よ之を燒棄するからん

### 棉布船等を焼く事

紐約ヘラルド新聞紙を取替せる人左の説を唱へり

我軍艦より出せし船の岸邊よ在りて運送蒸氣船を奪もん  
とせし時衆人の訛言よて木曜日の夜府中の人よ不意よ恐  
怖の心を生し棉布を家外よ出し盡く之よ火を付たり全く  
此騒動を起したる者も先役所を燒き其後平人の住家を燒  
んとするを企てしかり佛蘭西改革の時よても未ど此夜の  
如き騒動を見ず

此騒動を起したるも皆狡獪の徒よして多くを口舌ル之を  
助けたり彼も先已の棉布を燒きたるが故よ此罪ありと云



ふ能をず又一のラム船も堤邊に在りて半を沈み半を焼け  
とり他のラム船も河のアルジール岸に沈みとり最初此船  
隻及び棉布の焼失する金高を算すべからず此後數年を  
歴て初て其數を知ると雖も府中及び府の近傍よて二日の  
間無益に焼失する諸物の委しき話を知る能をず

河を焼けする船充滿し堤に近き所も同一有様よて一時は  
十八艘焼けする事あり此時を松明を以て勉て速に其船を  
焼けり此等の如き殘暴ある事未だ見聞せざる所あり折  
しも煙を空中を掩ひていと暗く火焰を盛んに燃上りて熱  
するに至る此有様を見るも快しといへども又哀みを催す

と多うりき其數百萬元の品物も一時に焼失せり又運上所  
に近き堤際よて焼けするラム船(アングロノルマン)あり未  
だ造らざる二三艘のラム船もアルジールの造船場に在り  
又大風急に起り雨を催しされむ予等暫時此河の所に船  
を移して終に碇泊せり時よ夜一時あり

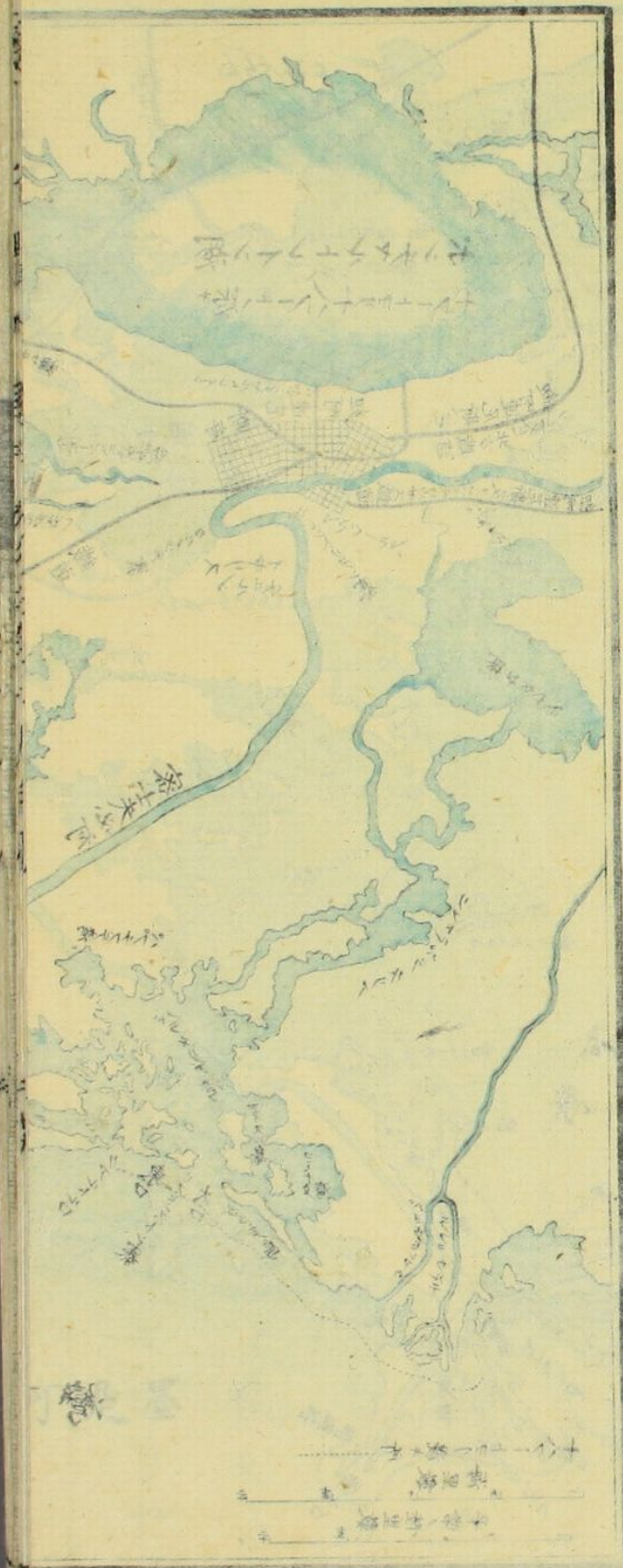
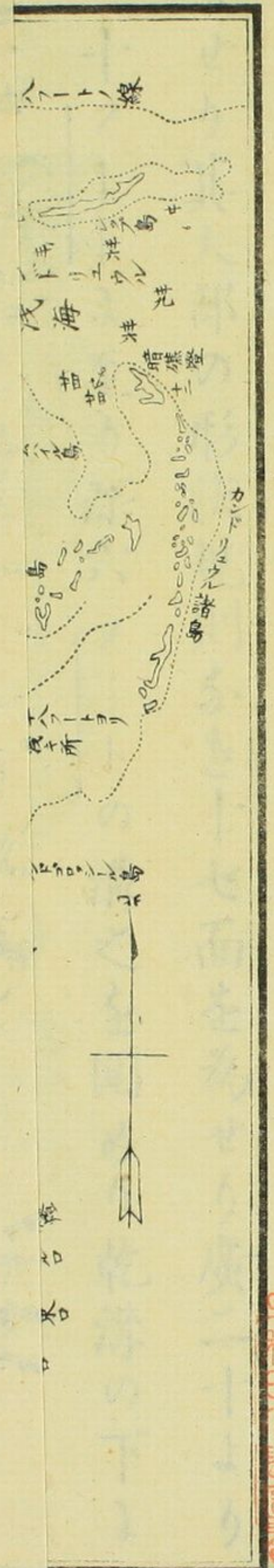
### 敵砦の説

最堅固あるゼクソン砦を五角よして其二方を河に向ひ三  
方を陸に向ひとり陸に向ひする方よを乾溝及び警固遼あ  
り河に向ひする方よを二十五挺備の砲あり其外に廣四  
十フットより七十フットに至りて其深六フットの溝あり



陸より向ひたる方より廣百五十フート深六フートの溝あり  
 河より向ひたる炮台の周圍は廣三十フート深六フートの溝  
 あり且河より向ふ二方を各ケースメートル一炮台の備へたる  
 炮八挺あり溝の兩方より二十四ポンドの忽微炮を備へり  
 胸壁をバシオンの入口を貫くを以て横は胸壁の防禦を  
 但バシオンを壁より炮を發する爲に造れり  
 下はあり炮台は炮百二十五挺あり其百挺を河より向て備へ  
 たり砦中を二階よりして磚石を疊みたるシタードルあり其  
 壁の厚五フートよりして炮門二列あり西方の木橋より砦に  
 入る橋も廣十フートの吊橋と相續きたり

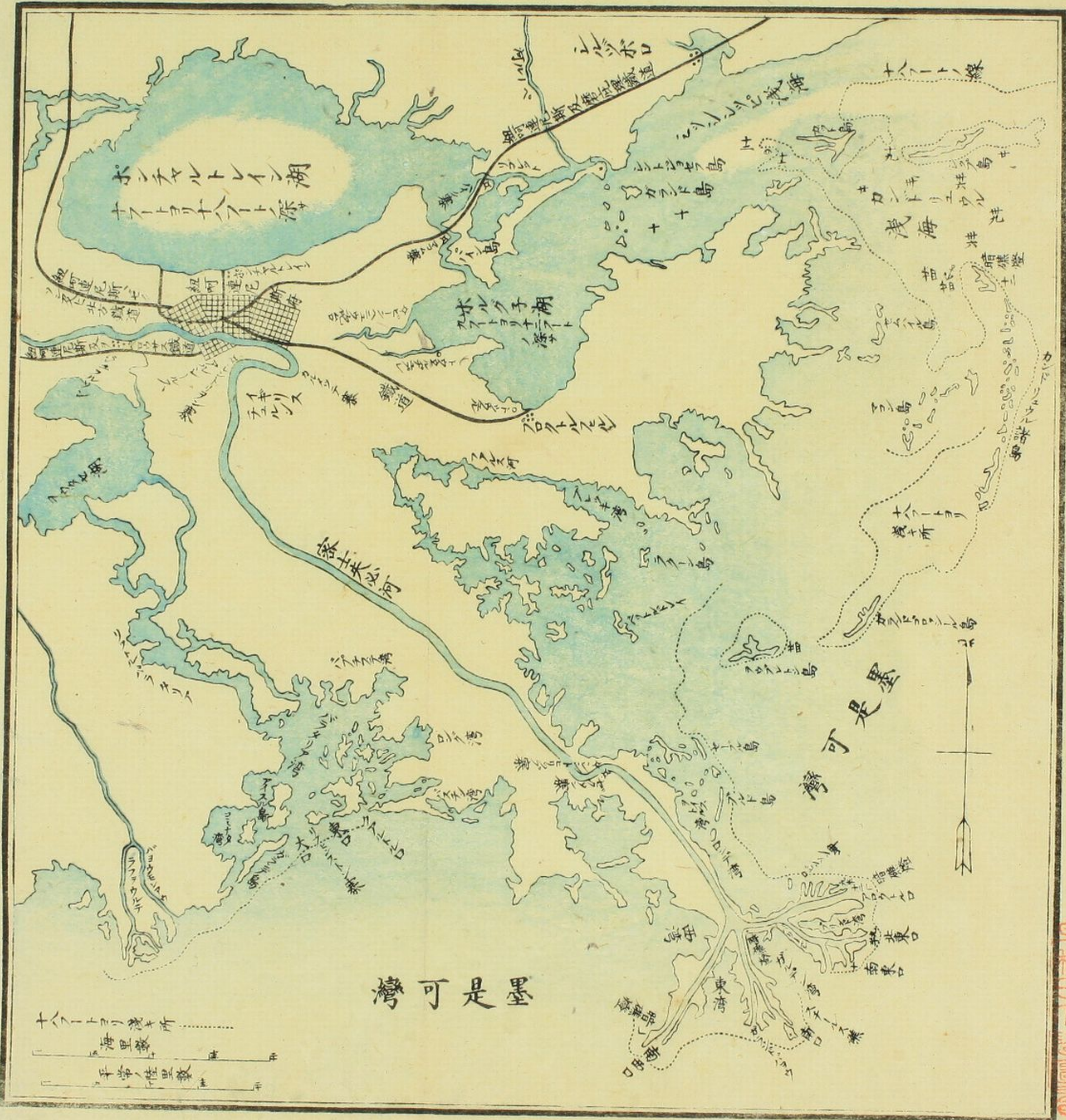
第四月二十八日コムモドールハルラギット及び大將ビトレル  
 の指揮して北部隊の奪ひたる子ラレアンズデルヒレプ島  
 及び其周圍に在る砦ゼクソンシントヒリフンセントリランジュ  
 ルプロクトルマムバネク等の圖





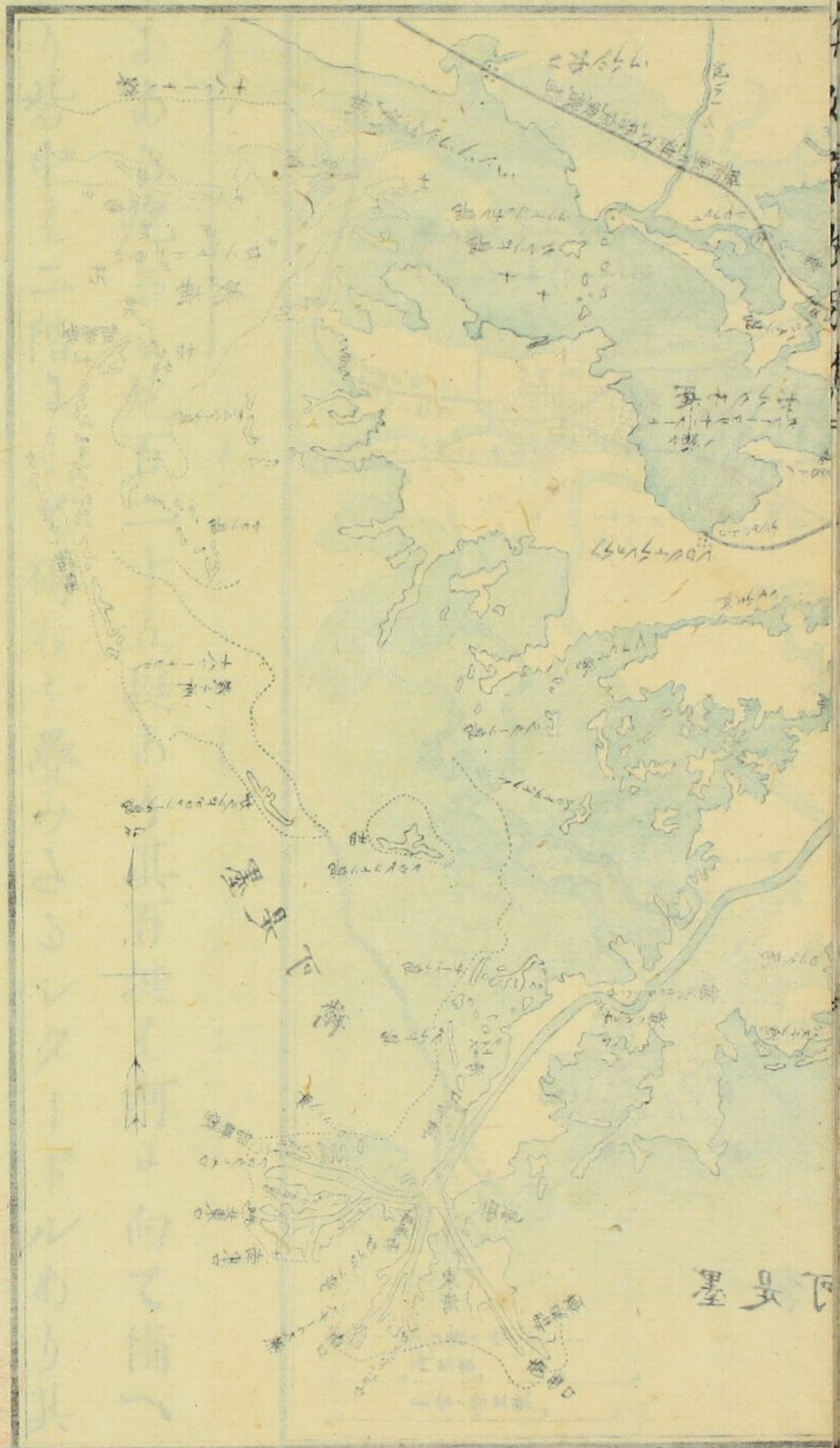
胸壁をバスシオンの入口を貫くを以て横は胸壁の防禦を  
 く但バスシオンを壁より炮を發する爲に造れり  
 下はあり炮台は炮百二十五挺あり其百挺を河に向て備へ  
 たり岩中を二階にして磚石を疊みたるシタードルあり其  
 壁の厚五フートにして炮門二列あり西方の木橋より岩に  
 入る橋を廣十フートの吊橋と相續きたり

第四月二十八日コムモドールハルラギツト及び大將ビトレル  
 の指揮して北部兵の奪ひたる子ラレアンステルヒリプ島  
 及び其周圍に在る岩ゼクソンレントヒリフンントリフンツフ  
 ルプロクトルマムバク等々の圖



墨是灣圖





セントヒルプ砦の事

セントヒルプ砦を一大部および之に屬せる二炮台より出  
 來せり其大部の形狀規則なき十七面を為せり廣二十より  
 三十フットに至り深六フットの溝之を圍めり乾溝の下に  
 廣七十フットより百四十フットに至る溝あり此砦の周圍  
 之を盡く乾溝及び警固巡あり其大なる溝の外に堤を築く  
 べき土を得んとて掘りたる溝あり其廣二十フット深四フ  
 ートあり此セントヒルプ砦を炮數百挺あり其中七十五  
 挺を河に向て備へたり此炮を皆バルベッテ臺場の一部のよ載せし  
 り又溝を守る爲に造りたる備へより形の丸天井の如き物



を加へ之を銃窓を明けたり

此二砦ともは磚石にて造りたりゼクソン砦の炮も河面上  
二十五フットシントヒルグ砦の炮も河面上十九フットの  
高きもあり此兩砦とも外臺場の炮も河面上十四フットの  
高きも在り敵兵此砦を奪ひたり時を唯炮數三十六挺も過  
ぎず其口径を三十二ポンドより大なる者あり且炮車の數  
甚ど少かり抑敵兵の起る前も紐阿連尼斯の運上所にて此  
砦を造るべき雛形を盗み取られざるを以て已むを得ず最  
初より有來りの結構も從て造りたり此甲砦の中央より乙  
砦の中央に至る所一里の四分三あり其間も在る河の廣半

里あり

此數砦を指揮せるジンソニケ左ンカンを千八百二十七年  
一邊西威業の哈力斯第も生れ千八百四十五年阿海阿の武  
事士官とあり左ストポイントの兵學校も赴き第四等も進  
みたり其後大炮隊の一官も任ト緬のイーストポルトも至  
り其後德過瑟斯も移りたり又ウールズ北墨是可を助く  
る兵の大砲隊の首とあり其後此頃敵將とありマヨルセ  
子ラールクウスミット及び大將ムロヘルと共に大將コイト  
メンの船を奪えんとて出せる艦送も加えりたり  
其後紐阿連尼斯の海軍ホスピタルもスミットの補佐とあり



りスミト退役したる後終之に代れり千八百五十八年  
紐呵連尼斯にて府中の諸事を改革せんとしてたる時左ンカ  
ン其頭たる任を蒙り其後録細亞那の建築官に任せられ  
終に大將の官に昇りたり

我船破損の事

上よりナ船及びマリアゼカルトン船の二艘を失ひたる  
とを載せたりナ船を新に造れる船として三十二ポ  
ンドの炮十二挺及び軌道に細線あり且心の上は旋轉する炮二  
挺を載せたり此船を紐約のウストルヘルトに造れる所  
して以前蒸氣船イルリノイ人を指揮してたる鳥遮爾些の

ムモドールボグス此船の甲比丹となりて之れを指揮せり  
其乗組人數を百四十八人あり

マリアゼカルトン船を百七十八噸のスクー子ル船あり千

八百五十六年干捏底格のイーストハダムにてクーク材が

よび栗材にて造れり此船を以前波士頓と紐約との注進船

あり一が去秋政府にて之を買ひセコルの造船場にて白炮

船に變りたり紐約の甲必丹シイセキ之を指揮せり

コムモドールベイリーの新聞

神を善を助けるよ由り今度フルラギットが指揮せる軍艦  
よて紐呵連尼斯のゼクソレントヒルブリンストンパ



イクの四砦及び紐呵連尼斯城の上下に在る數多の臺場を  
奪取り且敵の炮船蒸氣ラム船浮臺場火楸并に河の通行を  
妨ぐる鐵鎖及びブーム等を盡く燒棄るを得たり其時敵兵  
も自ら棉布及び船を燒けりと八百萬より一千萬に及びり  
又我兵の討死手負を千五百人に及びり其外生捕られし者  
數百人あり  
道路に妨げなく墨是可灣より巴安祿施に至り夫より遠く  
メムヒスの一も敵砦あらざる處に至るを得たり初に敵の  
楯籠りたる城砦も今を皆我旌旗の飛揚する勢實に感ふり  
と云ふべし

第五月八日モンルー砦にて書す

カニガ船の甲比丹及び紐呵連尼  
斯を襲ひたる軍艦の第二將

テオトリリス、ベイリ

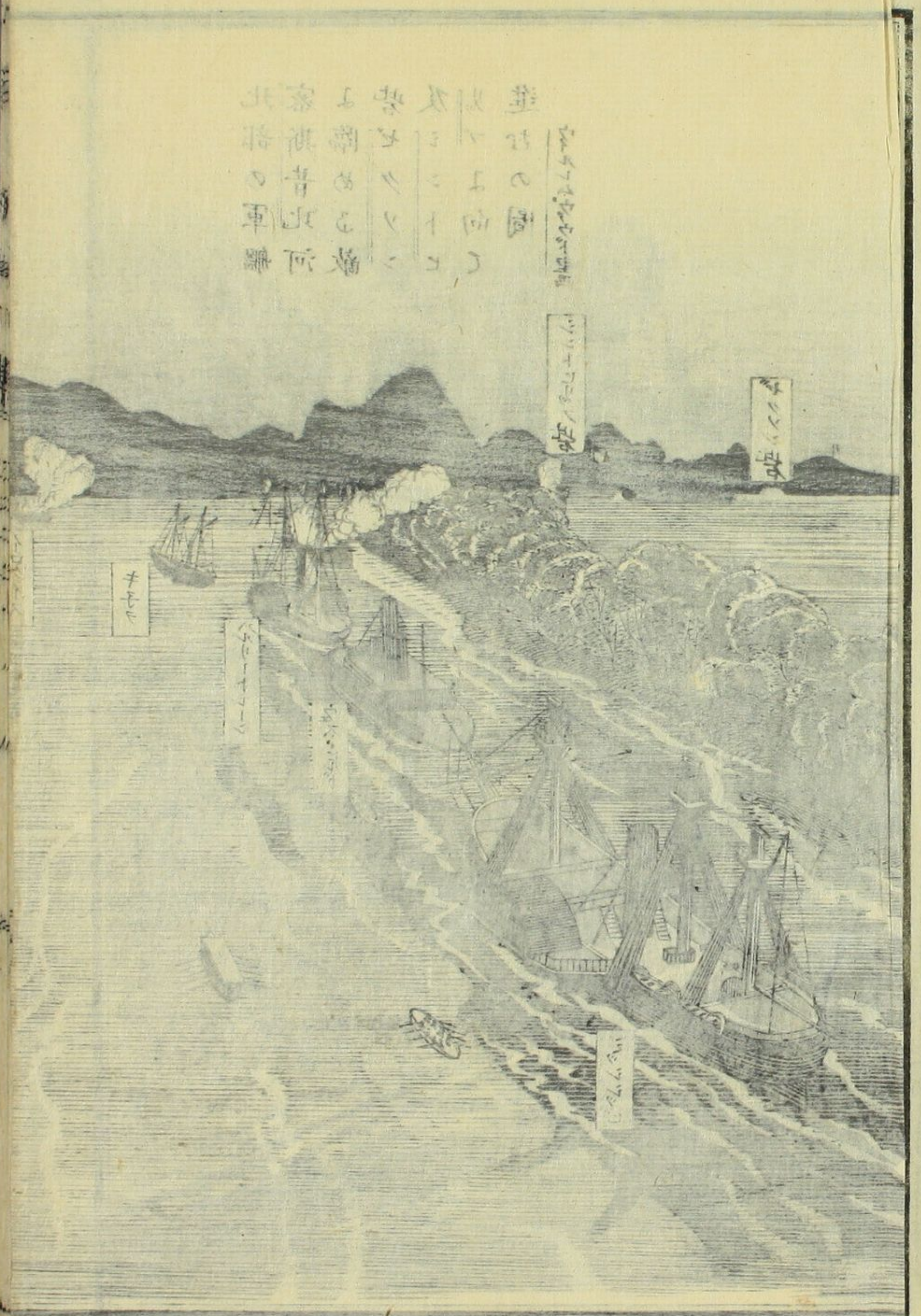
海軍秘書官ジテラン、ウルクレス

ユムセドールポルトルの新報

大將フルラモットを軍艦を率ひ二十四日の朝ゼクソン及  
ビントヒルプの兩砦を過ぎ、其後敵砦より妨げを爲  
すに少おくれむ今を既に紐呵連尼斯に著し、るあるべし  
十八日、ベクソン砦の火攻を初めてより我軍艦此砦を過  
ぐるの備を爲すに至るまで暫時も攻撃を歇むる事あり折

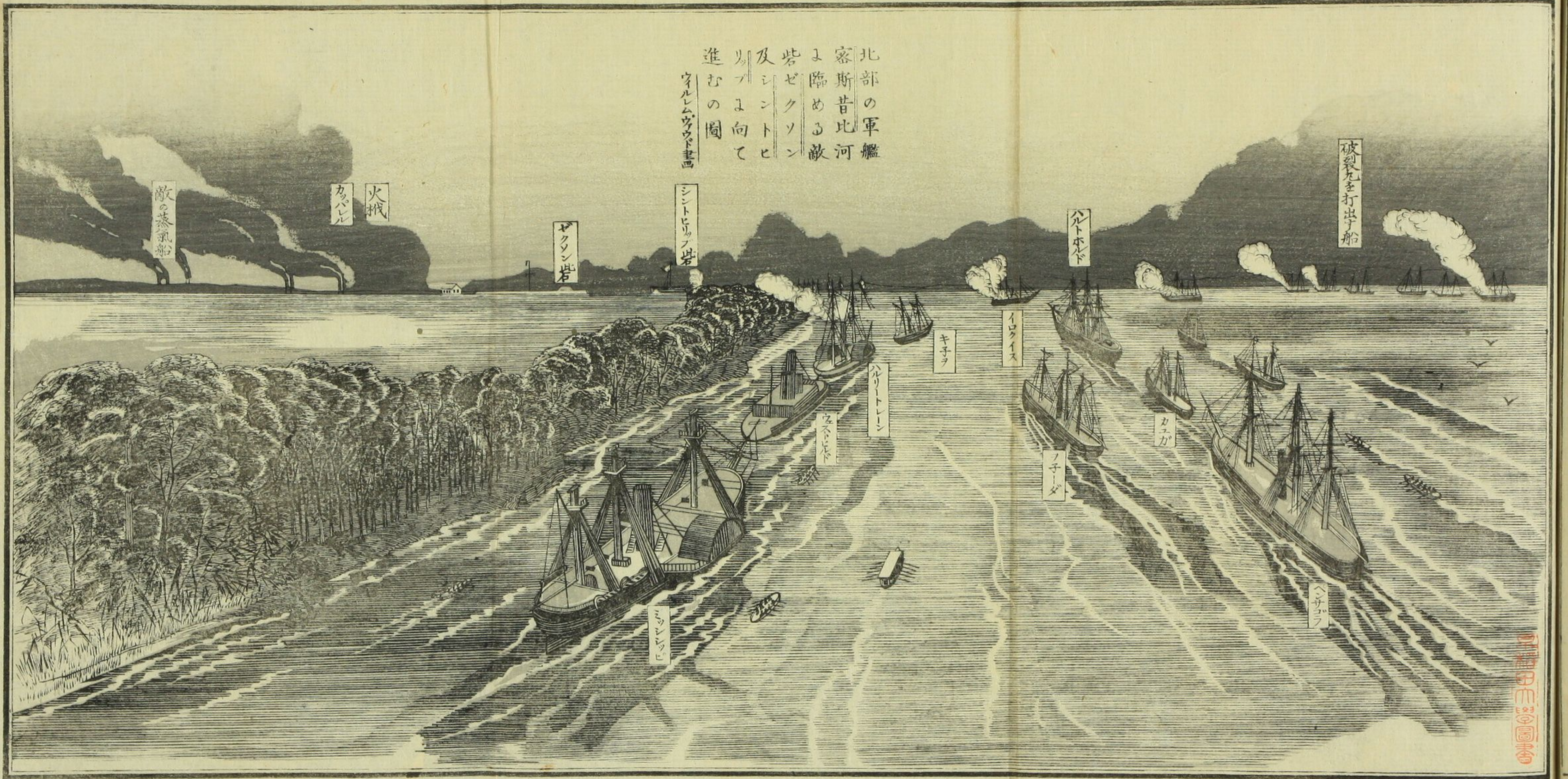


一も此岩を過ぎんとする軍艦を三横隊に分ち甲必丹へイ  
 リーラ指揮しとる第一隊をセントヒルップ岩を攻んとしと  
 り其船をカユガペンサゴラミシシビオ子ーダエロナカタ  
 ダンキ子ヲササヒコンの八艘かり又大將ヲルラギツトを  
 第二隊を率ひとり其船をハルトホルドブルークリンリチ  
 モントの三艘かりベルを第三隊を率ひとり其船をシオタ  
 イロクイスピノラウノナイタスカケン子キの六艘かり  
 又曰炮船隊は屬しとる蒸氣船も進行の妨げある敵の浮臺  
 場を撃てり其蒸氣船の名をハルリートレーンウストヒル  
 ドオワスコキリストンマリ子あり且ビクソン船を其間よ



軍艦の隊  
 第一隊  
 第二隊  
 第三隊  
 敵の軍艦





北部の軍艦  
 密斯昔比河  
 と臨める敵  
 塔ゼクソン  
 及レントヒ  
 及びは向て  
 進むの圖  
 ウルムウツト書

敵の蒸氣船

火城  
 カハレル

ヤクソン塔

シントビルフ塔

破裂を打出す船

ハルトボド

イロクイス

キ子ヲ

ハルリートレン

ウツボド

カエガ

ノ子ダ

ヘンガフ

シムツ

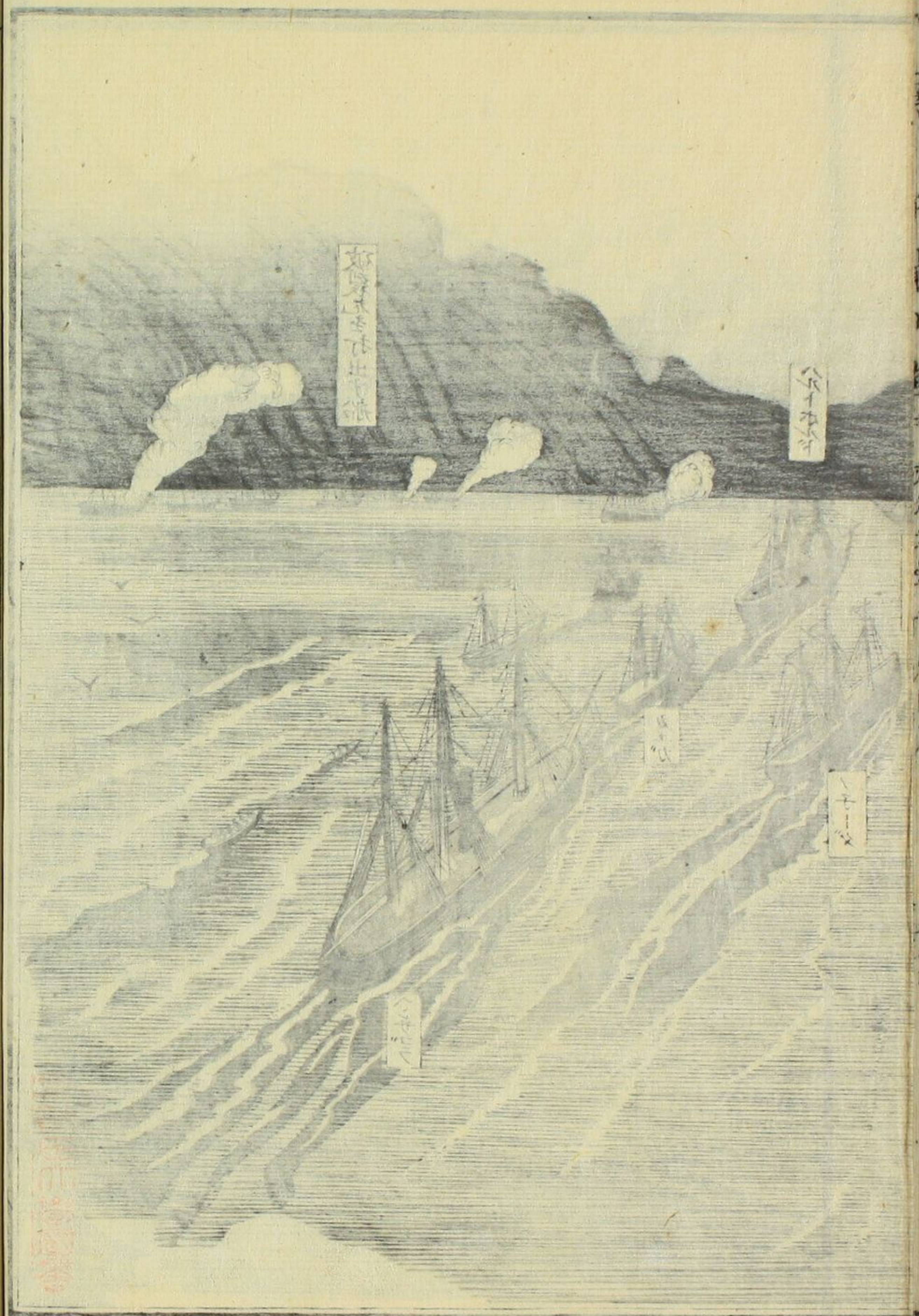
田中翁画

ドオワスコギリストンマリ子あり且ビクソン船を其間





てポルツモウト船を牽けり右の諸船も列を正し進行の備  
 を爲して其夜三時半に至る迄最騒しければ敵砦にて我軍  
 艦の企しをを知れり錨を揚る後一時十分及んでゼクソ  
 ン砦前より到りければ我軍艦より向て烈しく炮丸を打出せり  
 故に我曰炮船よりも其砦より向て破裂丸を打掛ると雨の  
 如し且此船より屬する蒸氣船よりも敵の浮臺場より向てスラ  
 プ子丸を多く發てるを以て遂に敵も數丸を發つ可うら  
 ざるに至れり頓て我軍艦火煙中を越へて既より遠く去りけ  
 れも曰炮船其發放を歇め蒸氣船も退く合圖を爲せり  
 夜既より明けて我蒸氣船の小隊及び炮船三艘も後れて未だ



海軍新開川集 文久二年十月印刷 四



敵岩の前を過ぎず敵兵も此一小隊は目を注げり且此炮船  
を河中より浮びよる船の碎片及び鐵鎖は礙へられり唯  
ノナ船のみレンシーヒルップ迄進みけるが敵方の大炮備へ多  
きを見て速に退きより

イタスカ船を頗る敵の炮丸は破られ且其一九蒸氣釜を貫  
きよりケン子ベキ船を幸に損ずる所なくして逃れり又  
我船の炮百二十挺おれども敵岩の高は備へよる百挺の炮  
とも固より其力相敵し難し然れども我船の害を受るゝ少  
し  
我軍艦を敵岩を過ぎし後三十分時よ至て留りしが最早敵

岩より炮を發つゝ少し故にポルツモート船を流を下りて  
敵岩の炮火を避るゝを得り予謂ふく此時我軍艦より發  
ちよる炮丸を敵岩の害を為しよることを知るべし

又我船より敵岩を過ぎし軍艦を見終る迄も列を正して進  
みより又遠方よて破裂の響を聞き大に驚きしが敵の炮船  
破裂しよるふるべし又我軍艦の敵船を悉く焼く能はざり  
しを其後三四艘の敵船忙しく所よ赴くよて知るべし  
遙に我軍艦の見ゆる折敵のラムマカサス二艘の船も我船  
を目掛けて攻來ると告る者あり予之を見るよ其ラム船を  
岸近く進みて我白炮船に衝來らんとする勢ふりければ我



二艘の蒸氣船及び三四艘の臼炮船より之に向て炮丸を打出せり然れども其マカサス船を怖るゝ足らざるを知て發放を歇めり兎角する間其炮門及び他の孔竅より火烟噴出して其内部を最早焼ると見へたり且其烟筒を我船の炮丸の中りて多くの穴あり其船身も亦大に損トするを予謂らく其ラム船を我軍船の敵砦を過し時大に害を為せし者かり予又此船の珍しきを以て之に錨索を結付岸に引寄せて其火を消さんとせし終に果さずして方又破裂せんとして頓て此船の炮を水底に落ち其舳の炮門より火炮を噴出しると恰も大獸の如く後忽ち雷聲を發ちて水底に沈みたり

又敵の蒸氣船一艘焼失し次は又其蒸氣船二艘焼失せり此外の河上までも我炮船よて多く敵船を焼けり然れども敵のマクレイ船河船の二艘及び一の浮臺場を前夜既に河を下りて今猶敵旗を揚るの話あり

且今猶敵のゼクソン砦を警固せんとして働ける浮臺場を實に畏るべし何とかれむ十六挺の大炮を備へてメルリマク船の如く炮丸よてを貫く能はず且四の大蒸氣機關を仕掛より此畏るべき敵を後よして進みたるを我軍艦の患かり予謂らく我軍艦の敵砦を過ぎし時此浮臺場は炮丸を打掛



一が之を傷くと能わざるからん又今朝に至り此浮臺場も蒸氣を揚げて速よ走れり時予白炮船より破裂丸を發ちて之を打んとせしぐ速よ逃去しり

今敵岩も紐呵連尼斯城と音信を通ずると能はず予謂らくろルラギツトも兵士よ下知して敵の傳信機を切りしからん

予もビトレルの指揮せるミア船を敵のレントヒルプ岩背よ遣し其岩の周圍五里の地よ在る我軍よ未と疫病杯の患ふきや否を訪ひ且ろルラギツトよ音信を傳へて兵糧の用意を爲さんとせり予又白炮船を同ト岩背よ遣し敵の守

兵潜よ逃んとせるを押へ且其糧道を斷んとせり又敵より我兵艦よ逃來りし者の説よ其岩中よ二月分の兵糧を備へ且炮裝藥彈丸等を備ふると多しされど守兵の心痛すると少あらずと云へり

午後よ至り我兵の發てる破裂丸も敵岩よ落ちて其シタドル<sup>岩の</sup>一部を燒き燃ると七時よ及べり而して予之を知らざれし敵兵再び火柵を流すと思へり此敵岩少時を我兵を敵すべく見へしり予謂らく速よモニトレミス<sup>二艘の船を</sup>遣して降るや否を取極むべし

是より前我白炮船も六日の間破裂丸を發ちて暫時も戦を



歌めざれど敵の炮火は中りて損ずる者少からず時よマ  
リアセカルトンと云へる一艘の炮船を敵の炮丸は火薬を  
を打貫りれて河底に沈みとりされど死者一人手負六人の  
みかり偕此戦は臨める將士の勇を實に賞するに足れり何  
とふれど六日の合戦は少くも惜るとふく且我炮丸よて我  
船を損ずるの過なく又敵の發つ炮丸雨の如くと雖も我船  
を他所に移し避けんとせるとふく又ハルリートレン船よ  
ても死者一人深手を負ふ者一人ありウノナ船を死者三人  
手負三人ありイタスカ船を敵の炮丸十四程中りとれど唯  
二三人の手負のみ

右敵砦を火攻りたる話を他の告文に委しく載すべし先早  
く此書翰を認りて我本局の望は叶へ一も哈丸那は消息を  
通ぜんとあり偕も此夜の戦を畏るべき有様あり河を燃  
揚りたる柵の火よて白晝の如く我軍艦を恰も火烟の中  
に戦ふが如く唯予が乗る船を敵の炮火より下流にありて  
害を受ると少ふし

予實に我軍艦の恙なきを願ひ且我船の悉く進行するに  
を悦ぶ又予察すらく我軍艦を既に紐阿連尼斯を奪ふふる  
べし

千八百六十二年第四月二十五日密斯昔比河中北部の蒸



氣船ハルリートレンよて謹て書す

其の下機 炮船隊指ダイトドホルトル

自國の新聞よ云く甲比丹ロドメンもあるもの口径三十  
ンチの大炮を鑄造をせり之を試みたるよ加農炮と拘く  
堅固よ出來せり今此大炮を大統領警衛の爲よ用ひあり  
其丸の形ニフート半よして重三千磅とす之を放てむ六七  
里を行くべし且其炮の重を殆と二百噸あるべし予謂らく  
若ワルソオル船又も他の英船よても此炮よ打るれも其船  
何の場合よて破壊せるや否を後の記者委しく書し難うる  
べし

大將フロイド公正ある説を以て庶人よ告諭し千二百三十  
六人をド子ルソン砦より他所よ移しより其人數をフロイ  
ドのブリガード隊よ附屬せる左のレジメント隊あり

費爾治尼亞

第二十六レジメント隊二百四十三人

同

第五十同

二百八十五人

同

第五十一同

二百七十四人

同

第五十六同

百三十四人

同

第二十同

三百人

總計千二百三十六人

紐阿連尼斯ボルレチンのゼクソン砦の上官より遣せる書



状又云ふ北部の船隊此砦を攻めたる時大炮を放てる其中等の數を算するに凡七十時の間十二セコンド毎に一發即ち一秒時五發ありと

又河海探索役人の船より南部より南河北河に用ゆる為よ四艘の鐵張加農船を餘分よ造れる由を海軍の兵卒よ言曾れり此船の型を新發明よて桑盧エスクウイゼルゼームスブシントロイスイースの製造よて其加農船を長二百二十フート廣五十フート水よ入るに六フートあるべし此船を何も直徑七フート六インチのプロペラ蒸氣船の艦に在て帆を附たりを運轉する具あり馬此船側を悉く鐵張よして水面よ出る部を其厚三インチ

の鐵あるべし此船一艘の價二十二萬元よて密斯昔比河下並よ海灣防禦の爲よ設けたり

アトジステントゲドスデンを葬るの事

金曜日よ出せる勇猛ある士卒の褒美を第四月十日カムデンの戦よ討死せるホーキンス配下のアドジステントゲドスデンよ賜へり彼を巧者ある戦を爲して死するよあらざれど猛き働を為し死生を顧みずして國恩を報ぜる勇まき士卒の一人あり其年齢三十ありホーキンスの手よ附たるに僅數十日の間よて元を第七レジメント隊の兵卒たりし甲比丹バルネト及びグラハム并よルーテナントデビホ



イスを手負人を接けて紐約に來りしレデメント隊の僅  
かる軍卒を率ひて彼の葬式を取行へり其グラハムも二個  
所の傷を被りしが程なく全快して再び軍役に出来るを得べ  
し  
桑盧の婦女次の書状を添へて美事ある銀の大盃を大將ブ  
ランクシェーデルに與へし

其文に云く此盃を合衆國桑盧の婦女大將ブランクシェー  
デルの國に忠義あるを尊敬する徴として贈れるとあり  
戦争新聞に云く第三月九日ベングスの配下ある紐約第五  
騎兵の軍兵等敵地を探索せんとして子ウマルクトよりハル

リスビルグに赴ける途中にて敵將エスバイの率ひし騎  
兵二千人に遭遇し暫らく戦ひて之を追散らし其十人を  
殺し六人を生捕れり此時味方を唯一人戦死し一人捕まれ  
しのみ

南部の船を奪ひし事

アイセークスミット船のロートナントユメンドルニコルン  
シントアウギスタンは陣取せし時敵のスクーデル船一艘  
南方十八里許に在るマタンサスの柵を越へて來ると聞き  
之を捕へんとてコロ子ルベルの率ひし兵卒二十五人と  
共し三艘の軍艦を出しけるが忽ち之を捕へてシントアウ



ギスタンに來れり其船名もイムバイレシチーと云ひて其  
送證文を持ち交易の爲に子ウプロヒデンスのチソーより  
子ウブリテインのシントランに赴く者なり其積荷も兵糧  
雜品藥品ふりりニコレナントニコルンとシントアウキスタ  
ンの庶民活計の品物欠乏の折に之を捕へりも幸ありとて  
積荷を入札にて其庶民に賣渡せり  
今月二十一日ケルハマと云へる加農船もモバイルの近傍  
よてルセハイルス船の船隊に圍まれ逃延んとするを捕へ  
たり是も木綿を積みてキーウストに運送せる船あり

查爾士頓近傍にて軍功の事  
カレストン

指揮官デボントの南格阿利納查爾士頓近傍にて軍功を立  
し一條を第四月二十九日ヘールと云へる蒸氣船にてドウ  
フポルポー河と南イデスト河と合流する所に設けたる臺  
場を奪ひし事なり此臺場も二十五磅の大砲二挺を備へり  
然れども敵兵甚ぞ狼狽し俄に逃ぐると見へて一挺の大砲  
を火藥を込め火蓋を切る計にして捨置たり且我ランワル  
トと云へる加農船も查爾士頓入口の一あるビールスの内  
海に乘込て敵の臺場を攻取たり

スクー子ル船を燒たる事

查爾士頓の報告に云く前の土曜日子ウプロデンスより此



港に來るスグー子ル船我船に追れて海岸の方へ赴きレク  
ーの砂場へ乗掛けて動く能はず其船の上官及び乗組人  
も之を北部へ渡さすとて燒棄たり此船をも鹽杯を積込め  
り

スグー子ル船フレスを奪へる事

北部にて奪ひとるスグー子ル船を第三月九日紐約に到着  
せり此船も晝十一時の頃陸近く通りをトテナントコ  
ンロイの乗組とる北部のレストレス船之を見出して追掛  
け查爾士頓より北方十四里の地フライインントを遙離  
れし所にて暴母丸を發ち其大櫓を貫きて終よ之を捕へと

り

半島に在る北部兵の事

予前示せし半島即ちイルレムスビルグにて大戦の時水  
曜日大將フランクリン及びセドウツキの率ゆる北部の  
兵卒敵兵のヨルクトオンより理治門的へ退く道筋を斷ん  
とてヨルク河のウストポイントへ上陸せる時敵將リー  
襲われて甚ど危うりり北部加農船の援へ因て敵兵忽ち  
敗北し子ウケントの方へ逃去れり我兵又チカホミニーの  
河岸へ退き木曜日に至り子ウケントへ押寄せけれを翌金  
曜日は大將ムクレレンの右軍來り共し子ウケントへ進



て大い戦ひ土曜日よ至て終よ之を攻取とり但此地も理治門的迄差渡二十二里許チカホミニー河のボトムブレヂ迄十二里ありされど之より理治門的よ攻入ると容易あるべし故よ敵兵を之を防んとて復決戦すべしと待請とり且ボトムブレヂも理治門的を距ると僅九里あり若敵兵此地よて敗走せど費爾治尼亞を我有とあるべし

今勝敗を決するよ大切の地とるチカホミニー河も理治門的よ入り西北よ流ると二十里よして東南よ屈曲し七十里よして復理治門的の北よ入りゼームストランより八里許ある占士河よ合せり

子ウケントの役所をペモンキー河より南三里よて理治門的より二十七里あり此地よを二十軒の建家あり其中六軒を倉庫よて四軒を旅館あり且別よ禮拜堂あり役所よて之を兼ね人口を五十七あり此地を理治門的の直路あるラストポイント迄十二里あり

人物評

今干捏底格のスペレギしふ居るレミオンへセンを轉宅セザして三邑よ住めり何とふれむスペレギしを元ノルホルク又もフランクリンと云へむかりロニ政府よ仕へり初を英領より一時英主デオルデ第四世の政府よ仕へ次よ英領



を免れし時華盛頓は仕へ後合衆國政府は仕へり且三度の戦争は遇へり千八百十二年の戦は其子と共に子ウロンドンドンの組合は選れ其後墨西哥の戦並に當今の戦は臨めり  
リテナントウアルデンとメルリマク船と名高き戦を爲せしモノトル船の指揮を爲して深手を負ひけるが今も其傷も殆ど全快し費勒特ヒラシールヒア費勒特費ヒラシールヒアにて製造する鐵張大フレガト船の指揮官は任せらるゝの説あり

カルレスボックスもアリナ船を指揮して南部の加農船十三艘と戦ひ其六艘を沈め己の船破れて將は沈んとし水甲板は押入る時大炮一發を放つて敵船一艘を沈めり彼を元鳥

遮爾些子ウブリンスウツキの上氏あり若き時父は語て曰く願くも海軍は出んと父之を叱て曰く汝人と爲り甚ど鈍し若汝海軍は出む甲板より落ちて溺死せんと翌朝其父彼の屋上は乘り避雷柱は早く登るを見たり又其母をヒキヒキの猛きローレンスと云へる者あり

南部の新報は云く卓爾治亞アタランタより出せる第四月二十七日の新聞紙は云ふメムヒス府も紐阿連尼斯と同ト難を受けんされど此を逃んとするも愚かりと云ふべし予思ふに此部兵必ず水路より進みて數府は迫らんとするに就き其用意を爲す處を肝要ありと



第五月一日理治門的より出せるエキセマイチル新聞紙は云く當今南部數邦の形勢を實は危くして元の企と相違せり如何なる手段を以て初の如く好機會を得べしや何の故を以て南部を斯く勢を失ふや又予等をして此難に至らしむる由を更は言張らしめむ其成行の如何なるやも今諸人の考ふる所あり

此度建德基の役人より出せる一の書付は云く以來合衆國は對して忠誠を盡し決して敵國を助けまじき盟を爲さざる僧も妄に敵と婚姻するを許さむ五十元より五百元の罰金を出さしむべしと

典捏西裁判所の役人ウハヒムプレイスを議政堂にて彼の大罪あるを評定し元老官は言上して其罪を糾し其答を爲さしめんとせり

アタラシタ新聞紙は云く先年大統領の位は昇んと競ひしデインベルを雅拉巴麻のヒンツヒルレは在りて北部の兵此府に入るとの時間道を求めて出奔せりと

近頃没せる人の小傳

紐約にて經濟の大家なるシシカムブレレンは年齢七十六にて退役し程なく水曜日長島のウスト子キに在る己の家は死せり其人と爲り最信實にして且用ゆべき大器量あり



初も府中の大商人ありしが其後公會より加り諸役を歴て會  
中の頭取とふれり又フィンビレンの大統領より一時ニス  
トルと爲りて俄羅斯より赴けり斯の如き人も紐約より未だ  
公會より出せしと少れかり

米利堅語のよき就き名高きヘンリードトレアウを第五月  
七日馬拽朱些斯のコンコルドにて死せり其人と爲り能く  
諸事を熟考し天地間萬物の究理を好み其著述も亦之よ準  
せり且其筆力達者ふれむ讀者其深意を解すも亦容易なる  
べし又幽居を得ると昔のアレキサンドルセルキルクよ  
りも幸ふりとす一年許の間新英一河の濱より小屋を營みて

任ひし時畫も地を耕し又も林中より狩りて少の獲物を樂と  
し夜も窓下より希臘及び臘の詩を口誦めり且此より訪來  
る人も彼の奇説を聞んとあり

暹羅王書翰の事

當今の暹羅第一國王嘗て合衆國の法使レスカス空ルより英  
語を學べると有りしが其教師の王より西教を信ぜしむる能  
はずと雖も王をして西洋の風俗を曉らしめしむると多し其後  
王をレスカス空ルの死を聞き第一宰相より命じ彼より寡婦より  
贈物を添へて書簡を贈れり

暹羅の首府曼谷中より任する外國事務宰相看ウパセプラ



克蘭よりレフゼセカスウルの寡婦アンナトカスウル  
と呈す

進羅第一國王プラバトソムズトプラコムコロウユウファ  
殿下より予と命ト君と一書を贈りてと夫君の恩を謝せし  
む抑と夫君の我王と英語を教ゆるを以て當今を書記官通  
辨官の助けなく王自らら歐羅巴人或も合衆國人と直と文  
通するを得たり

故と殿下もカスウルの功大なるを以て其寡婦及び孤兒を  
憐み助力せんを欲せり因て勘定役と命ト手元金の中よ  
り一千元を出し予等と命して之を君と贈らむ

予之を受取り以前本府と在留せる合衆國のコンシルレフ  
マツーンと頼て之を君と贈る

當代の第十一年三月五日即ち三千八百四十五日西洋一  
千八百六十一年第十一月二十一日土曜日ふり

諸國にて戦死員數の事

オウスールツの戦も百人と付佛蘭西人を十四人俄羅斯  
人を三十人墺地利人を四十四人を失へりワクラムの戦も  
百人と付佛人を十三人墺人を十四人を失へり莫斯科の戦  
も百人と付佛人を三十三人俄人を四十四人を失へり  
ズウ  
孟ンの戦も百人と付佛人を二十三人俄人を十四人を失へ



りワールテルローの戦も百人よ付佛人も三十六人數國合同  
の兵も三十一人を失へり千八百五十九年第六月四日マゼ  
ンタの戦も百人よ付佛人も七人墮人も七人を失へりソル  
ヘリノの戦も百人よ付佛人も十人墮人も八人  
を失へり

又處々の戰場よて手銃より無益よ放ちとる丸の數莫大ふ  
り四時の間一萬人よて手銃より四十回發ちとる丸も四百  
人より八百人を傷けるのみ

發閱目錄

舶來書籍類

官版原書類

同翻譯書類

老皂館

東都豎川三之橋

萬屋兵四郎







洋書調所譯 壬戌十月刻

官 版  
海外新聞別集

合衆國戰爭紀事

東都江左老臬館

